富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第11次調査概報

開谷東遺跡

2006年3月

上市町教育委員会

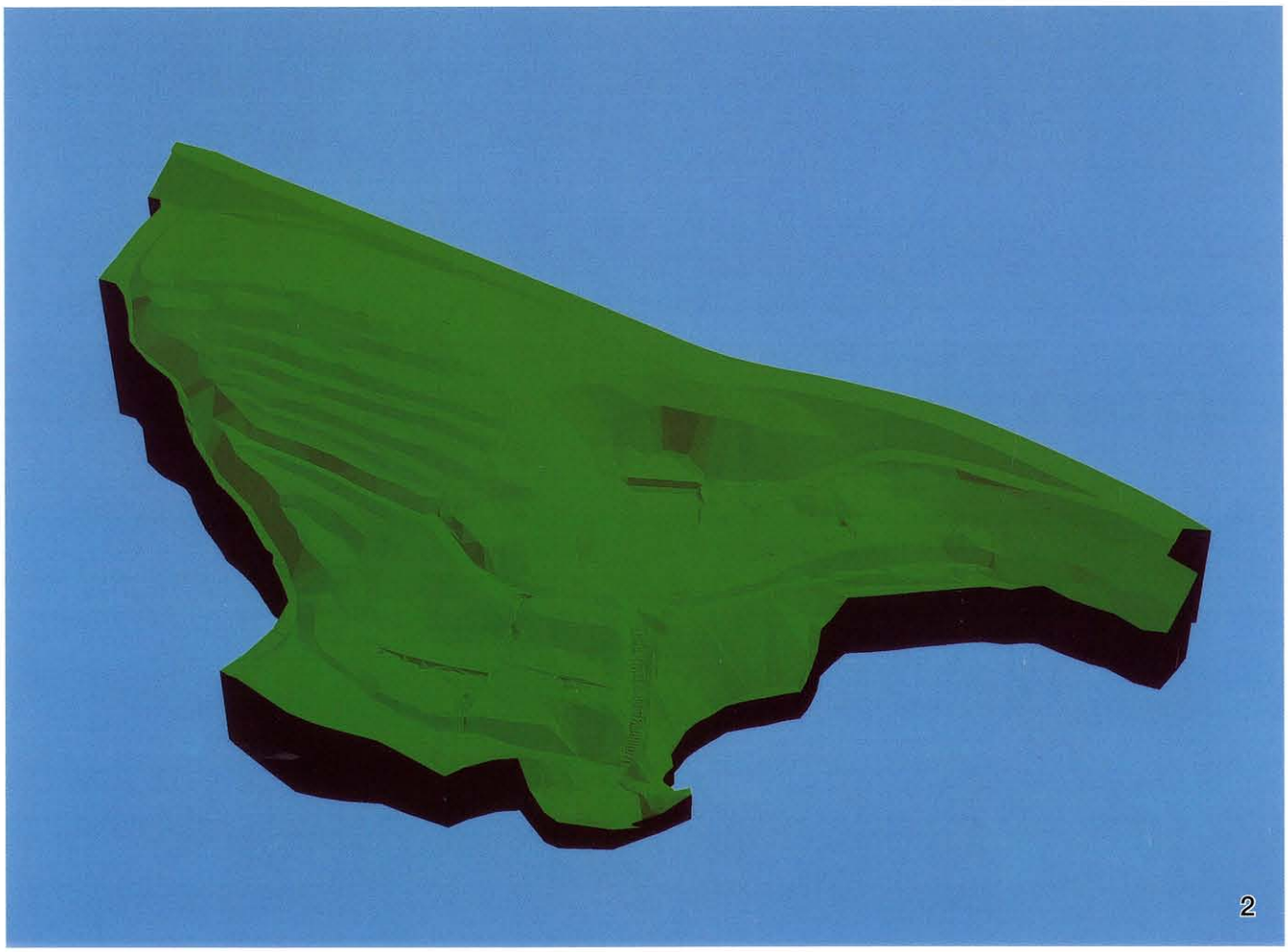
富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第11次調査概報

開谷東遺跡

2006年3月

上市町教育委員会



1.開谷東遺跡と史跡上市黒川遺跡群　2.開谷東遺跡鳥瞰図

1

2

1.八幡社拝殿前の大型水輪　2.第2トレンチ出土の赤彩土師器(椀)

序

上市町では、平成６年に下水道管理用道路敷設に伴う発掘調査で、12世紀末から14世紀までの中世墳丘墓群を調査しました。この遺跡が黒川上山古墓群であり、完全な形で今に残る全国でも稀な遺跡であることが判明しました。町ではその重要性から道路の方線変更を行い、全面的に遺跡を保存し、同年12月には上市町指定史跡として後世に残すことにいたしました。

上市町教育委員会ではこの遺跡を次代に残すため保存整備をする予定でありますが、その資料作成のための発掘調査を平成８年度より国庫補助を得て計画的に行ってきました。

以来10ヵ年10次にわたる調査で黒川上山古墓群（中世墳丘墓群）・黒川塚跡東遺跡（僧坊跡）・伝承 真興寺跡（山寺）・日枝神社裏遺跡（僧坊跡）・円念寺山遺跡（経塚群）・護摩堂村巻遺跡・護摩堂曲戸遺跡・黒川岸天遺跡など12世紀後半から15世紀に及ぶ同時代の宗教関連遺跡が次々と姿を現し、付近一帯が古代～中世の剱岳・立山信仰を支えた一大霊場であったことが明らかとなりました。

こうした一連の調査成果により、平成17年11月18日には黒川上山古墓群・黒川塚跡東遺跡・伝承真興寺跡・円念寺山遺跡について「上市黒川遺跡群　円念寺山経塚　黒川上山墓跡　伝真興寺跡」として国指定史跡の答申がなされ、平成18年１月26日付けで国指定史跡としての指定を受けました。

今年度の調査では、黒川地区に隣接し宗教集落として成立したとされる開谷地区に所在する「開谷東遺跡」の発掘調査を実施しました。調査では古代～中世の山岳寺院に関連すると見られる遺構や遺物が確認され、黒川遺跡群との関わりがいっそう深く認識されました。

調査は平成17年９月から平成18年３月にかけて実施しましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るよすがとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご指導をいただきました文化庁文化財部記念物課、富山県文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山考古学会、旧開谷地区のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成18年３月

上市町教育委員会

例　言

1．本書は富山県中新川郡上市町開谷(かいだん)地内に所在する開谷東(かいだんひがし)遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、平成17年９月21日から平成18年３月31日までの延べ40日間で実施した。

3．調査対象面積は約7,000㎡で、実際に掘削を行ったのはそのうち約145㎡である。

4．調査は、国庫補助金、県費補助金を得て上市町教育委員会が実施した。

5．調査事務局は上市町教育委員会におき、調査期間中、文化庁文化財部記念物課、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センターの指導を受けた。事務及び調査担当は、教育委員会事務局主幹 高慶孝と同主事 三浦知徳がこれにあたり、教育委員会事務局長 水原寛文が総括した。

6．遺物の整理、本書の編集・執筆は高慶・三浦が行った。遺物の実測・トレースは調査担当が中心となり、後述する整理作業員が行った。

7．調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義なご指導・助言並びにご協力を頂いた。記して深甚なる謝意としたい。
上市町黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会委員各位、富山大学人文学部 黒崎直、富山県教育委員会文化財課 池野正男、(財)富山県文化振興財団 宮田進一、魚津市教育委員会 塩田明弘、南砺市教育委員会 岡田一広、氷見市教育委員会 廣瀬直樹、立山町教育委員会 田中幸生、好田信悦、好田秀雄、森田源寿、好田吉次郎、作内正一　（順不同・敬称略）

8．調査参加者は次のとおりである。
発掘調査参加者：間野達(以上富山大学大学院生)、東良明、岡島怜子、黒木甫、小林高太、小林智海、高橋彰則、福西麿衣（以上富山大学学生)、荒木智恵子、金子みつゑ、川上富美子、酒井栄子、酒井文子、甚内みき子、高城英子、高城富美子、早崎秋子、樋口正一、松本純一
整理作業員：福沢佳典(以上富山大学大学院生)、東良明、岡島怜子、久慈美咲、小林高太、小林智海、竹中庸介、栃堀哲彦、村上しおり、用田聖実（以上富山大学学生)、城戸幾久子、甚内みき子

9．開谷東遺跡周辺の山地内には、本遺跡と関連すると想定される平坦面群が広がっている。全てが有機的なつながりを持って連続しているように見え、その範囲を区別することは困難である。今年度は開谷東遺跡の発掘調査と並行して、これらのうち字名「柿木平」において確認した寺院跡と思しき広大な平坦面群について簡易測量を実施し、第20図に参考図版として掲載した。

目　次

巻頭図版
序
例　言
目　次
Ⅰ　遺跡の環境 …… 1
Ⅱ　調査に至る経過 …… 3
Ⅲ　調査の経過 …… 3
Ⅳ　調査結果 …… 6
　1．遺　構 …… 6
　2．遺　物 …… 9
Ⅴ　まとめ …… 12
引用・参考文献 …… 13

図

第1図　地形と周辺の遺跡（1/50,000）…… 2
第2図　遺跡周辺図（1/5,000）…… 5
第3図　遺構全体図（1/400）…… 14
第4図　平坦面1実測図（1/200）…… 16
第5図　平坦面1石造物分布図（1/100）…… 18
第6図　第1トレンチ実測図（1/100）…… 19
第7図　平坦面3実測図（1/200）…… 20
第8図　第2トレンチ実測図（1/100）…… 22
第9図　第2トレンチ遺物分布図（1/100）… 24
第10図　遺物実測図（五輪塔）…… 26
第11図　遺物実測図（五輪塔）…… 27
第12図　遺物実測図（五輪塔）…… 28
第13図　遺物実測図（五輪塔）…… 29
第14図　遺物実測図（五輪塔）…… 30
第15図　遺物実測図（須恵器）…… 32
第16図　遺物実測図（土師器）…… 33
第17図　遺物実測図（土師器）…… 34
第18図　遺物実測図（土師器、珠洲、瀬戸美濃）　35
第19図　遺物実測図（越中瀬戸、土師器、鉄製品）　36
第20図　柿木平地区平坦面実測図（1/500）… 39

表

第1表　五輪塔計測表…… 31
第2表　土器・陶磁器類一覧表…… 37

写真図版

図版1　周辺航空写真
図版2　遺構写真（開谷八幡社）
図版3　遺構写真（開谷八幡社御神体）
図版4　遺構写真（平坦面1）
図版5　遺構写真（平坦面1五輪塔集積）
図版6　遺構写真（平坦面2・3）
図版7　遺構写真（第2トレンチ北区）
図版8　遺構写真（第2トレンチ西区）
図版9　遺構写真（SD01）
図版10　遺構写真（第2トレンチ東区）
図版11　遺構写真（第2トレンチ東区）
図版12　遺構写真（第2トレンチ南区、SP01）
図版13　遺構写真（SD02）
図版14　遺構写真（平坦面5～8）
図版15　遺構写真（平坦面9～12）
図版16　遺構写真（調査風景、柿木平地区）
図版17　遺物写真（五輪塔）
図版18　遺物写真（五輪塔）
図版19　遺物写真（五輪塔）
図版20　遺物写真（五輪塔）
図版21　遺物写真（五輪塔）
図版22　遺物写真（五輪塔）
図版23　遺物写真（五輪塔）
図版24　遺物写真（須恵器）
図版25　遺物写真（土師器）
図版26　遺物写真（土師器）
図版27　遺物写真（土師器、珠洲、瀬戸美濃）
図版28　遺物写真（越中瀬戸、土師器、鉄製品）

Ⅰ　遺跡の環境

上市町開谷東遺跡は、富山県中新川郡上市町開谷地内に所在する（第１図・第２図・図版１）。上市町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川に沿って東南から北西にのびる町である。西は県都富山市、北は滑川市、南は立山町に接し、東側は標高2,999mの剱岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。

遺跡の所在地である開谷地区は、黒川地区の南を東西に流れる郷川の支流村下川の右岸に位置し、山地の中腹が集落（現在は無人）となっている。同集落付近は標高120m前後で、西方眼下を北流する村下川との比高差は60mほどを測る。開谷東遺跡は、開谷集落の東側山中に所在する八幡社周辺の平坦面群の総称であり、平成11年度に実施した分布調査で簡易測量を実施した「平坦面11」に当たる。平坦面群は山腹を開削して設けられ、標高は社殿のある平坦面で157.5mを測る。なお、上市黒川遺跡群からは村下川を遡った場所に位置し、そのうち円念寺山経塚とは同一の山地上に立地する。

この開谷地区については、角川書店発刊の「日本地名辞典－富山県－」によれば、

> 開谷集落は、西に円念寺、南東は五位尾と接する。村名の由来は水成岩層中に貝の化石があるので貝谷といったとも、源内坊という寺院の戒壇があったことにちなんだとも言われる。中世には、好田坊・作内坊・奥野坊・源内坊などが開かれ、近年まで無本山無檀那であった。好田坊は京都吉田より来た神官の末裔といわれ、イチイの笏（しゃく）を伝承し、源内坊は源氏の末裔と称し、甲冑1領を収蔵していた。付近には鎌倉・室町期の五輪塔が数多く残されている。立山信仰の霊場として、大岩・岩峅・芦峅とともに開かれた村として、一時は七堂伽藍の繁栄を誇った。　（一部加筆）

とある。「好田坊は京都吉田より来た神官の末裔といわれ」とある部分は、谷を抜けて北西に広がる平野部がかつて堀江荘と呼ばれる京都祇園社領の荘園であったことと符合する。

また、開谷集落には「開谷踊り」という古式の舞踏が伝承されているが（昭和32年７月25日　上市町指定無形民俗文化財）、この踊りは春秋の祭礼の折に奉納されたほか、村の元服、堂塔の落成、立山参詣者の歓迎の際も踊られたといい、この地には古くから山岳信仰が深く根付いていたことを窺わせる。

以上から、開谷地区はその成立の時点から非常に宗教色の強い地域ということができ、隣接する黒川地区の上市黒川遺跡群とも密接な関わりを持っていたことが容易に推定される。

町内及び周辺の古代から中近世に至る宗教関係遺跡としては、市街地の南東に真言宗大岩山日石寺がある。この寺院は北陸有数の真言寺院で、開基は奈良時代まで遡るといわれ、本尊は磨崖佛の不動明王（国指定重要文化財）である。その裏山の京ヶ峰山頂には銅板製経筒及び外容器（珠洲壺）、銅鏡などが出土した大岩京ヶ峰経塚（12世紀後半）がある。また、市街地の東には曹洞宗の眼目山立山寺、南の立山町には日中玉橋経塚、日中東経塚がある。これら中世宗教遺跡のバックボーンをなすのが、文献上古代から中世に登場する堀江保・小森保あるいは堀江荘に関連するとみられる遺跡（江上Ｂ遺跡・東江上遺跡・上梅沢町遺跡・本江馬場田遺跡・横越遺跡など）、南北朝期から戦国時代まで中新川一帯に勢力のあった土肥氏をはじめとする豪族の城や居館跡（護摩堂城跡・稲村城跡・郷柿沢館跡・柿沢城跡・茗荷谷山城跡・郷田砦・弓庄城跡・千石山城跡・有金城跡・堀江城跡・堀の内城跡など）であり、これらの遺跡との関わりの中でその消長があったものと考えたい。このことから、平野部の遺跡との関連・山間部の城や寺院との関連も十分視野に入れると共に、密教における山岳信仰のあり方を十分に考慮に入れた調査が必要であり、中新川地区全体の中世遺跡の詳細な検討が必要である。

第１図　地形と周辺の遺跡（縮尺　1／50,000）

1.開谷東遺跡，2～4.上市黒川遺跡群（2.円念寺山経塚，3.黒川上山墓跡，4.伝真興寺跡），5.日枝神社遺跡，6.黒川岸天遺跡，7.護摩堂曲戸遺跡，8.護摩堂村巻遺跡，9.護摩堂城跡，10.広野Ｄ遺跡，11.広野Ｃ遺跡，12.眼目山旧開山堂遺跡，13.稲村山城跡，14.大岩日石寺磨崖佛，15.大岩京ヶ峰経塚，16.郷柿沢館跡，17.湯崎野西遺跡，18.湯神子Ｂ遺跡，19.柿沢城跡，20.茗荷谷山城跡，21.郷田砦跡，22.弓庄城跡，23.日中玉橋経塚，24.日中東経塚，25.横越遺跡，26.若杉神田遺跡，27.中小泉東遺跡，28.石仏遺跡，29.石仏嶋町遺跡，30.石仏南遺跡，31.大永田西遺跡，32.江上Ｂ遺跡，33.上梅沢町遺跡，34.上梅沢遺跡，35.有金城跡，36.堀江城跡，37.本江馬場田遺跡，38.金助山砦跡，39.小森館跡，40.堀の内城跡，41.水尾南城跡，42.黒川窯跡（越中瀬戸）

Ⅱ　調査に至る経過

上市町黒川地内では、平成５年度に農業集落排水事業の管理用道路が計画され、当該地区に所在する黒川上山墓跡の事前発掘調査が行われた。調査の結果、本遺跡が全国でも少ない中世墳丘墓群で、墓数も40基を上回るきわめて良好な遺跡であることが明らかとなった。上市町教育委員会は上級機関の指導のもと、県文化財保護審議委員湊晨氏（故人）・奈良大学学長（当時）水野正好氏に現地視察をお願いし、保存に関する意見をいただいた。この意見を元に、町当局と再度協議、地元黒川地区からの保存要請もあり、全面保存で合意した。その後同地内は平成６年12月８日町指定史跡として指定され、平成７年度には公有地化も図られた。平成８年度から国庫補助金・県費補助金を得て黒川上山墓跡の保存と一般公開のための資料収集を目的とする周辺調査を行っており、今年度で第11次調査となる。

Ⅲ　調査の経過

これまでの11次にわたる調査経過は次のとおりである。

調査年度	調査期間	遺　跡　名	調査対象面積	内　　容
平成６年度	５月～７月	黒川上山墓跡 （黒川上山古墓群）	約1,500㎡	13世紀代の墳墓22基を調査し、極めて良好な保存状態の中世墳丘墓群であることを確認した。また、調査区外でも多くの墳丘墓の存在を確認した。
平成８年度	11月～12月	黒川上山墓跡 （黒川上山古墓群）	約1,500㎡	45箇所の埋葬施設を検出し、全体で67基からなる大規模な中世墳丘墓群であることを確認した。また、本墓群が12世紀後半に成立／13世紀代に盛行／14世紀代に造墓活動中断／15世紀初頭に再興・終焉、という過程を辿ることが判明した。
平成９年度	８月～10月	黒川上山墓跡 （黒川塚跡東遺跡）	約5,500㎡	平安時代のものと考えられる墳丘墓6基のほか、平坦面群、掘立柱建物跡、礎石、石垣などを検出した。
平成10年度	10月～翌３月	伝真興寺跡 （伝承真興寺跡）	約3,200㎡	真興僧都の開基と伝えられる「真興寺」に比定できる寺院跡を確認した。本堂、塔、堂、山門、池などからなる伽藍の配置が明らかとなった。
平成11年度	９月～翌３月	伝真興寺跡 （伝承真興寺跡）	約3,200㎡	本堂が2回の建て替えを経ていることが判明した。また、多量の土師質皿と炭化物の入った土壙を検出した。
平成12年度	６月～翌３月	日枝神社遺跡 （日枝神社裏遺跡）	約1,500㎡	大規模な造成工事で造り出された平坦面、礎石、集石のほか、銅製鋲・鉄釘・土師質皿・珠洲甕片を納めた鎮壇に関わると推定される土壙などを検出した。
		円念寺山経塚 （円念寺山遺跡）	約1,500㎡	尾根上に連なる集石中から短刀や12世紀後半の珠洲が出土し、平安時代末期に築かれた経塚群であることが窺われた。また、その直下の崖面では行者窟を発見した。
平成13年度	６月～翌３月	円念寺山経塚 （円念寺山遺跡）	約2,000㎡	少なくとも24基以上からなる国内屈指の大規模経塚群であることを確認した。また、金銅製独鈷杵と銅磬が一括出土したほか、多数の短刀、輸入磁器製品、銅鏡、珠洲経筒外容器などが出土し、その内容においても突出したものであることが判明した。
平成14年度	７月～翌３月	護摩堂村巻遺跡	約12,000㎡	寺院、あるいは僧坊跡と考えられる広大な平坦面群を確認した。集石を伴う造成工事の痕跡、砂利敷きの通路跡などを検出した。
		護摩堂曲戸遺跡	約2,000㎡	地山・岩盤の削り出しの後に盛土によって構築された大型の塚状地形を確認した。
平成15年度	８月～翌３月	黒川岸天遺跡	約8,000㎡	造成による平坦面群と人為的加工痕の残る露岩を確認した。
平成16年度	７月～翌３月	黒川岸天遺跡	約5,000㎡	宗教施設に関わる可能性のある壇状遺構を確認した。また、前年度にも確認していた加工痕の残る露岩が、近世～近代の石切場跡であることが判明した。
平成17年度	９月～翌３月	開谷東遺跡	約7,000㎡	赤彩土師器や須恵器が多く出土し、上市黒川遺跡群の成立期（9～10世紀）に並行して、この地に寺院あるいは祭祀的な場が存在していたことが窺われた。

黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会

平成14年11月８日、今後の調査や保存・活用の方針を探るため「黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会」を発足した。組織は以下の通りである。

委員長：小島俊彰（金沢美術工芸大学教授・富山考古学会会長、考古）、副委員長：久保尚文（富山大学講師、歴史・文献）、委員：宇野隆夫（国際日本文化研究センター教授、考古）・岸本雅敏（富山県埋蔵文化財センター所長、考古）・久保智康（京都国立博物館学芸部工芸室長、考古・美術）・西井龍儀（富山考古学会副会長、考古）・福江　充（富山県立山博物館学芸員、歴史）・山岸常人（京都大学大学院工学研究科助教授、建築）、アドバイザー：伊藤清江［～平成15年６月］・舟崎邦雄［平成15年７月～平成17年３月］・平野博［平成17年４月～］（富山県教育委員会文化財課課長、行政）・坂井秀弥（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官、行政）、顧問：水野正好（奈良大学文学部名誉教授、考古）、事務局：上市町教育委員会事務局生涯学習・文化班（発足時：上市町教育委員会生涯学習課）

黒川フェスティバル

平成13年度より本遺跡群の周知と活用をはかる事業として、「黒川フェスティバル－中世の里、黒川郷を行く－」と題したイベントを年１回実施している。主催は地元黒川地区町内会・穴の谷弘真会・上市町・上市町町教育委員会・町観光協会で構成される実行委員会で、富山県教育委員会・富山考古学会・中新川郡教育会の後援を受けている。今年度で第５回目を迎え、町内でも秋の恒例行事として定着している。内容は下記のとおりである。

平成13年10月14日　第１回黒川フェスティバル（参加者約1,000人）

歴史講演：奈良大学教授　水野正好氏「中世の里、黒川郷を行く」、史跡見学会、遺物展示

平成14年10月13日　第２回黒川フェスティバル（参加者約800人）

歴史講演：国立歴史民俗博物館助手　村木二郎氏「極楽往生と経塚」、史跡見学会、遺物展示

平成15年10月12日　第３回黒川フェスティバル（参加者約1,200人）

歴史講演：俳優・日本考古学協会会員　刈谷俊介氏「遺跡を旅する」、史跡見学会、遺物展示

平成16年10月24日　第４回黒川フェスティバル（参加者約1,000人）

歴史講演：富山県立山博物館館長　米原寛氏「立山に向かう心象（こころのかたち）」、史跡見学会、遺物展示

平成17年10月23日　第５回黒川フェスティバル（参加者約1,000人）

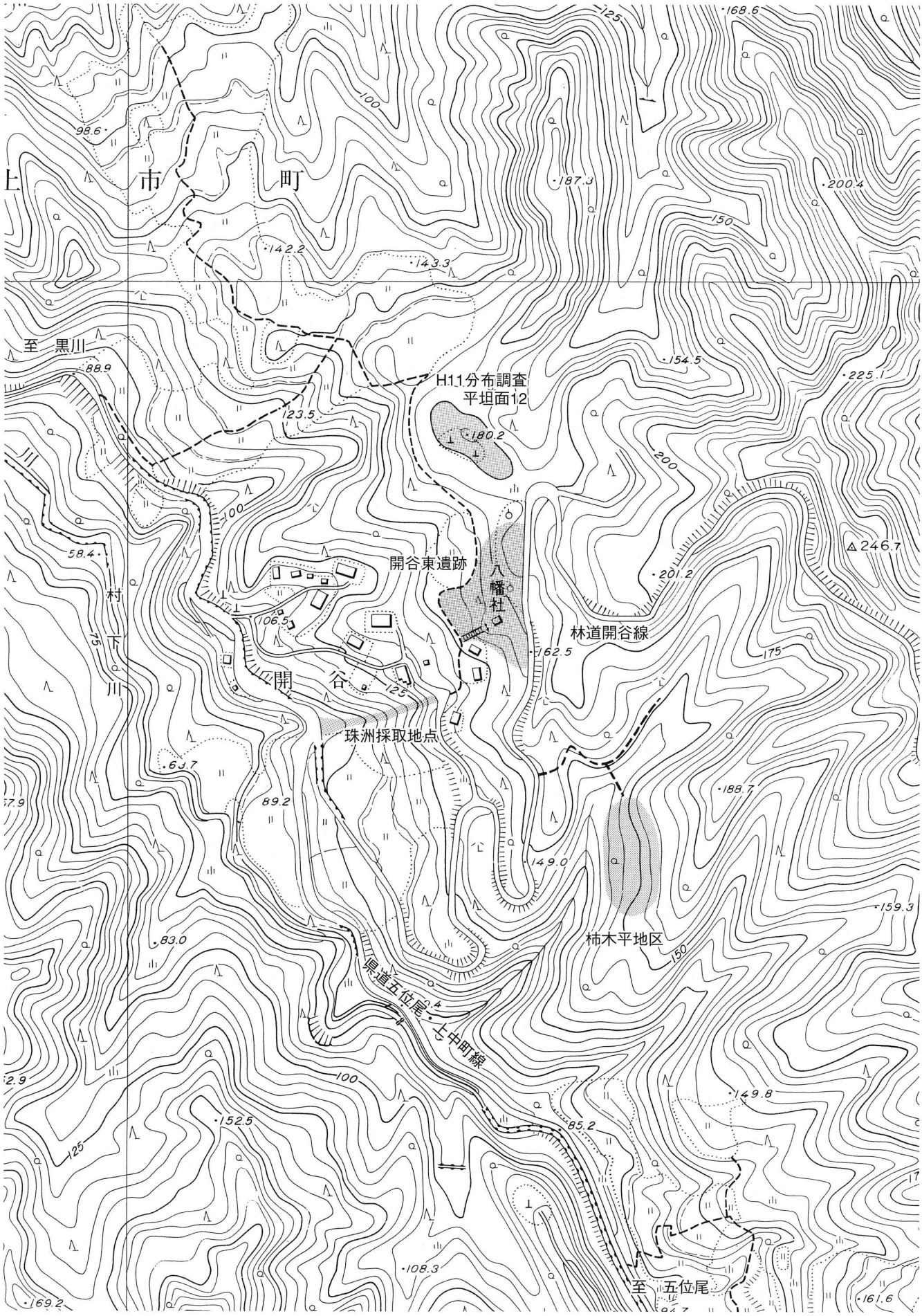
歴史講演：小松短期大学助教授　由谷裕哉氏「霊場について」、史跡見学会、遺物展示

「上市黒川遺跡群　円念寺山経塚　黒川上山墓跡　伝真興寺跡」の国史跡指定について

これまでの一連の調査成果が評価され、平成17年11月18日には本遺跡群のうち黒川上山古墓群・黒川塚跡東遺跡・伝承真興寺跡・円念寺山遺跡について「上市黒川遺跡群　円念寺山経塚　黒川上山墓跡　伝真興寺跡」として国指定史跡の答申がなされ、平成18年１月26日付け文部科学省告示第4号で国指定史跡としての指定を受けた。

平成６年の調査開始以来ここに至るまで11年という長い年月を要したが、広く本遺跡群の意義が認められ今後の保存･活用の途が開かれたことを素直に喜ぶとともに、これまで様々なご協力を賜った多くの方々に感謝の意を表したい。

なお、今回の指定により、従来の「黒川上山古墓群」と「黒川塚跡東遺跡」を合わせて「黒川上山墓跡」、「伝承真興寺跡」を「伝真興寺跡」、「円念寺山遺跡」を「円念寺山経塚」とそれぞれ呼称することとなった。また、表記・命名基準の統一を図るため、「日枝神社裏遺跡」を「日枝神社遺跡」とし、本書より記載を改めている。



第2図　遺跡周辺図（縮尺　1／5,000）

Ⅳ　調査結果

今回調査を実施した開谷東遺跡は、開谷地区の村社「八幡社」（図版2）の境内地及びその周辺の平坦面群の総称である。開谷八幡社の由緒は現在不詳であるが、万治３年（1660年）11月に記された「二宮記録」（若杉村神主二宮出羽守が佐々御宮之御帳を調整したもの）及び「富山県神社庁神社明細書」によると、「開谷村　観音」の記述があり、江戸時代初期には開谷村に観音を祀る神社が存在したことがわかる（上市町1970）。

誉田別命を祭神とする現在の八幡社の本殿に納められている御神体は、20年ほど前に撮影された写真（図版３）から判断すると、木造の仏像が５体ある。いずれも欠損・腐朽が著しく判然としないが、中央の一番大きなものは一木造の立像で、両腕は別材である。右手は欠損して不明ながらも左手を垂れ、来迎印を結んだ阿弥陀如来と考えられる。その左右には各２体ずつの立像が確認できるが、いずれも一木造で外側の２体は合掌し、内側の２体は胸の辺りに何かを掲げるような姿勢をとる。前者は阿弥陀三尊像の右脇侍である勢至菩薩、後者は左脇侍である観世音菩薩であろう。脇侍が２対存在する理由として、１組の阿弥陀三尊像に脇侍が追加された、別々の場所に存在した２組（あるいはそれ以上）の阿弥陀三尊像が混在したという２つのパターンが想定されるが、かつてこの地が栄禄・天正年間の上杉勢の兵火や明治初年の大火によって２度にわたり灰燼に帰したという過去を顧みると、後者である可能性がある。

今回の調査では、本遺跡の中枢部分であったと想定される現在の社殿位置を中心とした約7,000㎡を対象に下草・倒木・雑木の除去を行い、地形の確認を行った（第３図）。その範囲は世界測地系の平面直角座標Ｘ78975～79125、Ｙ22030～22120にあたる。この範囲内に所在する大小様々な平坦面についてそれぞれ平坦面１～12と呼称し、そのうち平坦面１と平坦面３についてトレンチを設定して掘削を行い、遺構・遺物の検出及び現地形の形成過程の解明を試みた。以下にその概要を述べる。

１．遺　構（第３図～第９図、図版２～図版16）

Ａ．平坦面１（第４図～第６図、図版４・図版５）

平坦面１は、現在八幡社の社殿が乗る平坦面で、本遺跡の中枢であったと想定される空間である（第４図）。南西方向に開けた不整形の平坦面で、長さは約50m、幅は社殿のある北半部で約25mを測り、南側に行くにつれて徐々に狭くなる。標高は157.5mほどでほぼ平坦であるが、林道開谷線からの進入路から続く拝殿の周囲はやや高くなっており、拝殿はそこを一段掘り込んだ面の上に建てられている。拝殿改修時及び進入路敷設時に大幅な地形の改変があったことが窺われる。また、平坦面南端付近には東方斜面側から突き出すかたちで基壇状の高まりが認められる。ここも林道からの進入路などによって後世の改変を受けているが、現状では上面が６～７m四方の方形を呈し、高さは１～1.5mほどである。ほぼ西方に向き、平坦面そのものや現社殿の方向とはずれている。なお、この基壇状の高まりにおいては現状でも人頭大のやや平たい石がいくつか確認でき、また過去に円形の石組みや陶磁器類が出土したこともあるという。しかしそれらは全て本殿新築の際にコンクリート製の基礎内に放り込まれたということである。

拝殿の前面には鳥居・石段へと続く石畳が直線的に伸び、その両側には八幡社に関わる各種の石造物が認められる（第５図）。これらにはそれぞれ紀年銘が刻まれており、個々の造立年月は、狛犬（台座）が大正９年12月、石灯籠（竿部）が昭和４年３月、入口の石柱が昭和４年５月、鳥居（柱部）が昭和５年４月、水盤が昭和５年４月８日である。いずれも大正末～昭和初期で、この時期に大規模な改修が行なわれたことがわかる。

これらの石造物群とは別に、数箇所に五輪塔の部材が集積されている（図版５）。これらは社殿背後を南北に走る林道開谷線の敷設工事の際出土したものと伝えられているが、その詳細については記録が残っていない。五輪塔については遺物の項で詳述するが、いずれも中世のもので、その他の石造物群とは明確に区別できる。林道を挟んで社殿背後に続く斜面には平坦面が連続し、また墓跡と思しき塚状の高まりも認められることから、中世には墓域が広がっ

ていた可能性が高い。

今回の調査では、平坦面南端部付近の基壇状の高まりとその前面の平坦部を対象として第1トレンチを設定し、掘削を行った（第６図）。想定外の大雪に見舞われて作業を中断したため一部での確認にとどまったが、前面平坦部では表土（１層）・流土層（２層）の下位において、後述する第２トレンチ東区で検出した盛土層（第８図10層）と類似する土層（３層）が確認された。この３層は基壇状の高まりの直前で途切れており、また西方の平坦面縁部に向けて厚みを増していることが窺われた。上面は標高157m前後でほぼ水平で、この面が本来の遺構面であったものと想定されるが、今回の調査では土壙・柱穴等の遺構は確認できなかった。３層の下位には旧表土層とみなし得る黒褐色土層（４層）があり、その下位で地山（５層）を確認した。

本トレンチでは２層中において２点の弥生土器片が出土した以外に遺物は出土していないが、トレンチ周辺で珠洲（第18図10・11）・越中瀬戸（第19図７）を採取した。

Ｂ．平坦面２（第４図、図版６）

平坦面２は、平坦面１の北方斜面に開削された平面台形状の狭小な平坦面である（第４図）。標高は約161mで、平坦面１との比高差は2.5mほどを測る。上方からの流土により上面は南西方向に傾斜している。今回の調査では掘削は行っておらず詳細は不明であるが、小規模な堂宇の存在が窺われる。

Ｃ．平坦面３（第７図～第９図、図版６～図版13）

平坦面３は、平坦面１の西方に一段低く広がる平坦面で、今回の調査における主要な調査対象地区である（第７図）。南北約30m、東西約15mの南北に長い平坦面で、平坦面１同様南西方向に向く。標高は154m前後で、不明瞭ながらも部分的に段差や池状の窪みが確認できる。西側は深い堀状の通路で区切られているが、対岸の平坦面とは本来同一面であったものが、この通路の掘削によって隔てられたものと考えられる。平坦面３とこの通路との比高差は南端部分で約4.5mを測り、北上するにつれてその差は徐々に小さくはなるものの、全体としてその落差は非常に大きい。その掘削量は膨大なもので、単なる通路ではなく、聖域と外界とを隔絶する役割をも併せ持っていたものと考えたい。

この平坦面３では、第２トレンチを設定して遺構・遺物の検出を試みた（第８図）。第２トレンチは幅２ｍのＬ字型トレンチを十字に組み合わせ、それぞれ北区（２Ｔ－Ｎ）・西区（２Ｔ－Ｗ）・南区（２Ｔ－Ｓ）・東区（２Ｔ－Ｅ）と呼称した。先述したように今年度は調査期間中に想定外の大雪に見舞われてトレンチの完掘ができず、最終的には雪の中最低限の記録を取った上で現地作業を終了した。ここでは平坦面３の土層、遺構、遺物の出土状況について、現時点で把握している範囲で概略を述べる。

ａ．土　層　本トレンチでは１層～14層にわたる土層を確認した。地山は14層で、その上面は一定の起伏を有する。南北断面（第８図Ａ－Ａ’）で見ると、地山面は南区北端付近において50cmほどの段差をもって北側に落ち込み、そこから6.5mほど北でさらに一段落ち込んでいる様子が確認できる。この部分は一部未掘のため不明ではあるが皿状の地形となり、３層・４層によって埋まる。その上位は先述した段を埋めるかのように２層が覆い、現状で観察できるほぼ平坦な地形を形成している。また、南区では南方に向けて緩やかに傾斜し、その上位に乗る７層（盛土か）を切り込んで溝ＳＤ02が掘削され、そこを６層が埋めている。

東西断面（第８図Ｂ－Ｂ’）では、地山面は東側の平坦面１との斜面下方から緩やかな傾斜を持って下り、先述した南区北端付近において20cmほどの落差をもって一段落ち込んで平坦となる。その先では穴ＳＰ02と溝SD01を経て、平坦面３の西側を画する堀状の通路へと約1.5mの落差をもって急激に落ち込む。穴ＳＰ02の埋土は２層で、溝SD01の埋土は２層・12層・13層である。東区東半部では地山の上に11層（旧表土層）、10層（盛土層）が乗り、平坦面１との区画となる斜面部を造成している。平坦面１側の10層上面は標高156.7mほどでほぼ水平な面となり、その上位を２層が覆う。トレンチ東端付近ではさらにその２層の上に９層・８層が乗るが、これらはいずれもその東側を南北に

走る用水路（素掘り）の掘削土と想定される。

b．遺　構　今回の調査では建物跡などの明確な遺構は確認できなかったものの、溝・穴等をいくつか確認した。西区で検出した溝SD01は南北に走る二段掘りの溝で、幅約2.5m、深さ約70cmを測る。床面直上からは２点の須恵器（第15図９・27）が出土しているが、いずれも転磨しており、北方から流されてきたものと考えられる。また、下段肩部の地山面上では越中瀬戸（第19図11）が出土しており、近世以降の掘削であるものと考えた。

南区で検出した溝SD02は、SD01とほぼ直行するように東西に走る溝である。幅約1.2m、深さ約40cmを測り、断面形はＶ字型であるが北側が急傾斜で南側は緩やかである。表土直下に掘り込まれているため樹根や立ち枯れ痕などにより撹乱を受けている。埋土である６層中には近世の土師器（第19図14・16～23）が多く、これも近世以降の掘削であろう。また、床面直上からは鉄製品（第19図27）が出土している。

このSD01・SD02に近接して、２箇所の穴を検出した。南区の穴SP01は径28cm深さ35cm、西区の穴SP02は径40cm深さ25cmをそれぞれ測る。いずれも14層上面から掘り込まれているが、SP01の埋土はSD02の掘り込み面でもある７層であり、内部からは古代～中世と思しき土師器の小片が２点出土している。これにより、SP01はSD02に先行して存在していたものと考えることができる。

これらの他、未掘削のため性格の不明な遺構を北区において２ヵ所検出した。SX01は南北4.3m、東西50cmの範囲で地山の落ち込みが認められるものである。現在の検出範囲及び周辺の状況から判断すると、平面形が隅丸方形を呈する竪穴状遺構の一部が検出されたようである。またSX02はSX01の南側に位置し、径60cmほどの円形を呈する（南半部はトレンチ外）。いずれも埋土は２層ではなく、３層に類似する土層である。

c．遺物の出土状況　本トレンチにおいては、第１トレンチとは対照的に遺物が多量に出土した。最終的には取り上げ単位で612点を数え、その内訳は土師器（古代～近世）544点、須恵器32点、珠洲17点、瀬戸美濃１点、越中瀬戸６点、縄文土器９点、石製品（?）１点、鉄製品２点となる。

これらの分布状況を図化したものが第９図である。煩雑さを避けるため、50cm四方の区画ごとに点数を集計したものを網点の濃淡で示し、比較的数量の少ない須恵器・珠洲・瀬戸美濃・越中瀬戸・鉄製品についてはそれぞれ異なる形状のドットでその出土位置を示した。遺物全体としてはトレンチ中央部から北区にかけて分布が濃密で、個別に見ると須恵器が北区に多く、また越中瀬戸が西区の溝SD01付近に分布していることがわかる。なお、南区の溝SD02付近の遺物集中部は、そのほとんどが近世の土師器（素焼きの蔵骨器）で占められている。北区の遺物は概ね２層中に含まれるが遺物の年代による深度差は認められず、２層上面～下位までの範囲で混在している。また遺物の９割近くを占める土師器はほとんどが摩滅した小片で、これらの遺物の大部分は２層とともに周辺から流れ込んだものと解釈できる。ただし、北区北半の３層出土遺物は全て古代のもので、土師器も比較的良好な残存状況を示すものが多く、３層によって埋まる地山の起伏（SX01・SX02を含む）は古代に遡るものである可能性が高い。

D．平坦面４～12（第３図、図版14・図版15）

平坦面４～12は、平坦面１～３の北方に段々畑状に連なる平坦面群である。最高所に位置する平坦面４は南北55m、東西20mと広く、標高は平坦部で170m前後である。西端には長さ30m、幅８m、高さ1.5mほどの土塁状の高まりが認められ、上面には数箇所に墓の痕跡がある。この平坦面４は近年まで果樹園として利用されており、また林道開谷線の敷設工事に伴う開削・盛土もあったようで旧状を留めていない可能性がある。

平坦面５は平坦面４の北西に一段低く設けられた平坦面で、その規模は10m×４mほど、標高は169.5mを測る。下方に連続する平坦面群のように帯状にはならず、性格が異なっている可能性がある。

平坦面６～10は平坦面４・５の下方に帯状に連なる狭長な平坦面群である。それぞれの平坦面はほぼ南北に伸び、正面はほぼ真西を向く。長さは40～55mで、下方の平坦面にいくほど地形に合わせて徐々に短くなる。幅は平坦面

6・8・10が概ね2～3mで、その間の平坦面7・9は1～2mを測る。あまり明確なものではなく、またどれだけ旧状を留めているかは不明であるが、相対的に広狭を繰り返しているようである。平坦面10の下方で平坦面11との間にある通路も幅1～1.5mほどと狭く、これも含めるとこの広狭の繰り返しは3組となる。今回の調査では掘削を行っていないため詳細は不明と言わざるを得ないが、これが意図的なものであるとするならば、広－墓域、狭－墓道という対置も可能であろう。また、その下方の平坦面11・12はこの広狭のパターンから外れてはいるものの、同様な類推ができるかもしれない。

なお、これらの平坦面の西側には、地形に沿って北東方向に進路を曲げながら平坦面3西側からの通路が続いている。平坦面12の南端ではこの通路からの入口のようなスロープが認められるが、やはり全体として比高差は2～3mと大きい。やはり先述したようにここでも「外界との隔絶」という意味が与えられていたものと考えたい。

2．遺　物（第10図～第19図、表1・表2、図版17～図版28）

今回の調査では、平坦面1では35点の五輪塔部材、第1トレンチでは2点の土器、第2トレンチでは612点の土器・陶磁器類等を得た。また、調査区内及びその周辺においても20点以上の土器・陶磁器類を採取している。ここでは、概ね図版に沿って種別ごとにそれぞれの概要を述べる。なお、各遺物の計測値等については表1・表2に記した。

A．五輪塔（第10図～第14図、表1、図版17～23）

今回の調査では、平坦面1の拝殿前において数箇所に集積されていた五輪塔部材のほぼ全てを持ち帰り、図化・写真撮影を行なった。その内容は、空風輪7点、火輪12点、水輪11点、地輪1点、水地輪4点の計35点である。これらはいずれも元位置を保っておらず、本来の組み合わせは不明である。ここでは各部材ごとにその概略を述べる。

a．空風輪　第10図1～7は空風輪である。石材ごとに特徴が異なり、粗い砂岩製の1～3は、風化・摩滅が著しいが現状で判断する限り空輪と風輪との間が広く、欠首が設けられていた可能性がある。その場合、14世紀代に比定できる。安山岩製の4～6はいずれも欠首はなく空輪頂部が尖る。4・5は15世紀代のものと推定されるが、横断面形が扁平な6は16世紀代まで降る公算が強い。軟質な凝灰岩製の7は、全体的に風化が著しく全体形が想定しにくいが、石質が後述する空風輪・火輪・水地輪の3石からなる特異な五輪塔と類似し、それらと組み合わせられるものと推定される。15～16世紀代のものであろう。

b．火　輪　第10図8～第12図2は火輪である。石材は第10図8・9が砂岩、第11図1～8が安山岩、第12図1・2が凝灰岩である。第10図8は小ぶりながらも薄い軒に対して峰が高く、14世紀代のものと考えた。9は後述する一群（第11図1～5）と全体的な印象は近いが、石材・大きさが異なりまた軒口もほぼ垂直で、ここでは14世紀代に遡るものとして捉えておきたい。第11図1～5は、それぞれに異なる部分はあるものの全体的な形勢は共通し、15世紀代のものと考えた。6は1～5を低くしたような形態となり、7はそれをさらに軒先を大きく反り返らせたものである。いずれも16世紀代のもので、7の方がより後出的な様相を示すものと考えた。8は下半部を欠失して全体の形状は不明であるが、上面が広く比較的大型であったことが窺われる。第12図1・2は石材の性質によりいずれも風化・摩滅が著しく本来の形状をほとんど留めていないが、いずれも下底面に穴が穿たれているという点で共通する。

c．水　輪　第12図3～第14図2は水輪である。第12図1は、直径57cm、高さ43cmを測る大型の水輪である。県東部では他に例を見ない大きさで、現在のところ最大のものであろう。石材は層状の特異な風化痕を見せる粗粒な砂岩であり、肉眼的には県西部で盛んに用いられた岩崎石（太田石）に類似する。なお、今回報告する五輪塔に使用されている砂岩は、程度の差はあるがいずれもこの石材に類似するものである。正面形はつぶれ気味の球形の上下端を切り落とした樽形で、最大径はやや上よりの位置にある。ただし本品は屋外で天地逆に据えられていたためか下半部の風化が上半部のそれよりも著しく、本来は中位に最大径をもっていた可能性がある。石材の性質上全体的に風化・摩滅が著しく判然としないが、三方に梵字らしきものが刻まれているのがかろうじて確認できる。正面は「バン」、

側面は「バク」であろうか。背面には現状では梵字は確認できない。風化の進行具合や梵字の遺存状態から判断すると、造立当初は直径60cmを下らない大きさであったものであろう。これに伴う他の部材は周辺では見当たらないため断言は避けたいが、県内最古例の一つとして知られる高岡市福岡町の西明寺塚五輪塔（13世紀代）の水輪とは形態・石質・風化具合ともに非常に類似しており、本例も13世紀代に遡る可能性は高い。

第13図～第14図２は全て安山岩製である。最大径が25～30cmの中型品（第13図１～７）と20cm以下の小型品（第13図８～第14図２）とが存在する。前者はその正面形から①球形の上下端を切り落とした樽形のもの（１・２）、②最大径が上半部にあり壺形を呈するもの（３～５）、③それぞれを上下から圧縮したように扁平化したもの（６・７）とに分類できる。それぞれの境界は曖昧で漸移的ではあるが、敢えて年代を比定するならば①は14世紀代、②は15世紀代、③は16世紀代となろう。小型品は不安定な形態ではあるが樽形～壺形をなし、15世紀代のものと考えた。

なお、これら中・小型の水輪は全て正面に梵字「バン」が刻まれ、月輪を伴うものは認められない。「バン」の書体には３つのパターンが認められ、小型品のものはいずれも共通している。

ｄ．地　輪　第14図３は砂岩製の地輪で、この周辺では唯一確認できたものである。地輪はその形状から転用の幅が広く、大部分が既に持ち去られているものと考えられる。なお、拝殿北側の小屋（かつての本殿であったという）の柱基礎には地輪と思しき直方体状の石材が用いられている。この地輪は一辺20cmほどの小型のもので、ほぼ立方体に近い形状をなす。なお、図で下面とした部分は欠損によるものではなく整形が及んでいない部分であり、この面を下にして一部を地中に埋めて安定させたものと考えられる。砂岩の利用という点で、14世紀代の可能性がある。

ｅ．水地輪　第14図４～７は水地輪で、文字通り水輪と地輪が一体化したものである。４点中２点がほぼ原形を留めており、それによるとほぼ立方体状の地輪に同じ幅の水輪が乗り、その平坦な上面には火輪を受けるためのほぞが作り出されている。このほぞは風化の著しい２個体についても本来は存在したものであろう。なお、６・７の下面には、穴が穿たれている。納骨空間の可能性があるが、残る２個体については全体に浅く窪められている程度であり、詳細は不明である。なお、同様な個体は県内では例を見ず、この地域独特なものである可能性が高い。石材はいずれも軟質・粗粒な凝灰岩で先述した空風輪（第10図７）・火輪（第12図１・２）とよく共通し、また火輪下底部にほぞ穴が存在することからも、本来はこれらの３石からなる変則的な五輪塔であったものと推測できる。

この水地輪の年代は対比資料がなく不明ではあるが、４石からなる五輪塔の基本的な形勢が崩れ、一石五輪塔や空風火輪を一体化させたものなど様々な形式が生み出されるようになった15～16世紀代のものと考えておきたい。

Ｂ．土器・陶磁器類（第15図～第19図、表２、図版24～図版28）

ａ．須恵器（第15図、図版24）　第15図は全て須恵器である。１は杯蓋である。端部は素縁で上面には明瞭な稜が立ち、外面には降灰による自然釉がかかる。ここでは杯蓋として図示したが、別器種の一部である可能性もある。２～10は杯・椀類である。２～５・10は杯の口縁部で、やや外傾しながら上方に立ち上がる。10は直径21cmの大型品である。６～９は椀で、やや膨らみを持って立ち上がるもの（６・８）と外方へ開くもの（７）がある。９は底部で、回転糸切り未調整である。焼成は還元軟質で灰白色～黄灰色を呈するものが相対的に多い（２～４・７～９）。11～20は壺・瓶類である。11は長頸壺の口縁部である。口径25cmを測る大型品で、外反して伸びる口縁端部は上下に拡張して外端面は凹面となる。12～14は肩部、15～19は体部である。20は外径2.5～3cm、内径1～1.2cmの円筒形をなす破片で、浄瓶あるいは水瓶の頸部であろう。これらの壺・瓶類の焼成は概ね還元硬質で良好である。21～33は甕の体部である。外面は平行叩きを基本とし、一部叩き後にカキ目調整を施すものが見られる（27～30・32）。内面当具痕はいずれも同心円文となるが、粗大なものと細密なものとがある。なお、21の内面は磨かれたように滑らかになっている。焼成は概ね還元硬質で良好であるが、赤褐色を呈する酸化硬質のものもある（28～30）。

これらの須恵器の供給元はいずれも立山町上末窯跡群と考えられ、杯と椀形態の共存、回転糸切り未調整の底部の存

在、長頸壺の口縁部の作工などから判断すると、概ね上末釜谷３号窯～２号窯、つまり９世紀末～10世紀前半の範囲で捉えられるものであろう。

ｂ．土師器（第16図・第17図、図版25・図版26）　第16図～第17図は全て古代のロクロ土師器であり、今回の調査出土遺物の大部分を占めている。摩滅が著しく残存状態が悪いものが多いが、可能な限り図示した。

第16図１～12は、椀の口縁部である。口縁外面直下に撫でが巡り、口縁端部がやや外反して断面Ｓ字状を呈するもの（１～５）、内湾しつつもほぼ直線的に開くもの（６～11）、内湾して端部を丸くおさめるもの（12）が認められる。口径は概ね12～13cm内外にまとまるが、19cmの大型のもの（11）、９cmの小型のもの（12）も存在する。６は今回の出土遺物の中で椀の全体形を窺うことのできる唯一の資料で、口径12.2cm、器高4.5cm、底径５cmを測る無台椀である。なお、９には口縁部から内面にかけてタール状の付着物が認められ、灯火具として使用されたようである。

第16図14～第17図26は、椀の底部であるが、一部に皿の底部を含んでいる可能性もある。摩滅により観察しづらいが全て回転糸切り未調整といってよく、有高台のものは出土していない。底部の作工には体部との境界部分で高台状に段差をもつもの（第16図14～35）とスムーズに移行するもの（第17図1～26）が認められる。ただしその区分は曖昧なもので、どちらともつかないものも多い。底径は4.5～7.5cmまで幅があるが、５～６cmのものが多い。

これらの椀には、今回図示したもので見ると61点中23点（37.7％）に赤彩が施されている。しかし、これらは一部の良好な遺存例（第16図４など）を除き、摩滅した器面の凹部にかろうじて赤色顔料が残存しているのが確認できるといったものが多く、本来の赤彩率はもっと高かったものと考えられる。また、第17図１・２などでは外底面にも赤色顔料が認められ、この赤彩は基本的には内外面の全てに施されていたものと想定される。なお、今回の調査では黒色土器椀は１点も出土しておらず、赤彩土師器椀に特化した遺物組成と言えよう。

27～29は皿である。やや内湾する体部から口縁端部で外反するもの（27）、ほぼ直線的に開き口縁部付近が若干肥厚するもの（28・29）とに分けられる。口径は13～14cmでほぼまとまる。なお、29は内外面に赤彩が認められる。

これらのロクロ土師器は、椀の形態や皿の存在などから、田嶋明人氏による古代土器編年（田嶋1988）のⅥ期の範疇で理解でき、先述した須恵器の年代と矛盾をきたすものではないものと考えた。

ｃ．中世土師器（第18図、図版27）　第18図１～６は中世土師器で、全て非ロクロ成形の皿である。いずれも口縁部に一段の横撫でを施し、端部外面をやや弱く面取りし端部を丸く仕上げている。口径は15～16cm、12～14cm、10cmと３段階に分かれる。なお、１は内面に赤彩を施している。これらは概ね12世紀後半～13世紀前半のものと考えた。

ｄ．珠　洲（第18図、図版27）　第18図７～22・24～27は珠洲である。このうち24～27は本遺跡出土品ではなく開谷集落内を流れる水路（第２図参照）において採取したものであるが、併せて報告する。７は小型の壺Ｒ種の口縁部で、短く立ち上がりくの字型に外反する方頭をなし、口径は11cmを測る。吉岡康暢氏による珠洲編年（吉岡1994）による珠洲Ⅱ期（13世紀前半）のものと考えた。８～14は壺あるいは甕である。８～12は体部で、11が荒い綾杉状となる以外は全て水平～右下がりの平行叩きである。12は底部の鉢形と胴部との接合部の破片であるが、内面には卸目状の櫛描が認められる。この櫛描は接合時の撫で痕を切っており、接合後に施されたものであることがわかる。現状では幅約２cmで10目確認できるが間には空白部分もある。この櫛描がどのような目的でなされたものかは不明である。13・14は底部で、いずれも残存状況は良くないが13では外底面に静止糸切り痕が残る。15～22は片口鉢である。15・16は同一個体と考えられるもので、直線的ながらもやや膨らみをもって立ち上がる器体をもつ。外傾する口縁部は端部にしっかり面をとり、外端部を若干つまみ出している。内面に卸目は施されていない。外底面には静止糸切り痕が残る。13は膨らみをもつ体部からしっかりと面をとった口縁部を内湾気味におさめたもので、幅の狭い端面上に櫛描波状文を施す。14は膨らみをもって立ち上がる体部の破片で、破片上端部では口縁端部を外側につまみ出していることが窺われる。外面は上半部に降灰による自然釉がかかるが、図中破線部分を境として下方には一切認められず、

重ね焼きの痕跡であろう。なお、内面に卸目は確認できない。以上の３点はいずれも口径が20cm以下の小鉢であり、各々の特徴から珠洲Ⅰ～Ⅱ期（12世紀後半～13世紀前半）の範疇で捉えられよう。19～22は体部で、19には内面に2.4cmで12目の細密・鋭利な櫛歯原体による卸目が施され、珠洲Ⅱ期（13世紀前半）の特徴を示している。

24～27は、先述したように開谷地内の水路で採取したものである。24～26は壺あるいは甕の体部で、外面は綾杉状の叩目が確認できる。27は片口鉢の体部で、内面には1.5cmで７目のやや幅広の櫛歯原体による卸目が施されており、珠洲Ⅳ期（14世紀代）に比定できる。

ｅ．瀬戸美濃（第18図、図版27）　第18図23は、瀬戸美濃の碗である。天目茶碗で、上半部には薄い鉄釉がかかり下半部は露胎となる。藤澤良祐氏による大窯編年（藤澤1993）の第３段階（16世紀後半）以降の製品であろう。

ｆ．越中瀬戸（第19図、図版28）　第19図１～13は越中瀬戸である。１～３は皿である。１は鉄釉の深手の丸皿で、底部は径の小さい削り出し輪高台、見込みは蛇の目釉剥ぎされている。２・３は緑灰色の灰釉折縁皿である。４～10は鉄釉の丸碗である。４～７は身が深く直線的に立ち上がるが、８は身が浅く開き平碗に近い。10は底部で、削り出し輪高台である。11は外面が褐色の鉄釉、内面が錆釉の瓶で、内外面ともに密な轆轤目が巡る。12は鉄釉の建水で、内面は口縁部付近のみ施釉されている。13は錆釉の擂鉢口縁部で、口縁部の縁帯が垂下するものである。

以上のうち、２・３・５・７・11・12は、いずれも灰～灰白色を呈する硬質・緻密な胎土を用いており、16世紀の後葉に比定されている黒川窯のものである可能性が高い。また、13の擂鉢もその口縁部形態から黒川窯と推定される。その他の資料については判断材料が少なく年代の特定は困難であるが、１の丸皿については唐津における蛇の目釉剥ぎの開始が17世紀前半とされることから、それ以降のものであろう。

ｇ．近世土師器（第19図、図版28）　第19図14～25は近世の土師器で、蔵骨器の蓋と身（壺）である。古代・中世の土師器とは胎土・焼成において明瞭に区別できる。14～16は蓋で、直線的に開く皿状の器形で端部が肥厚する。17～20は壺の口縁部で、内傾しながら立ち上がる口縁部の端部が丸くおさめられるもの（17・18）と摘み上げられるもの（19・20）とが存在する。21～24は墨書のある体部片で、21は「化」、22は「七」、23は「柿」?、24は「ツ」と読める。25は壺の底部で、回転糸切り痕を残す。これらの年代については形態からの類推は困難であるが、21の「化」の上方には右上から左下へと払うような筆跡があり、これを勘案すると元号の「文化」（1804～1817）である可能性がある。その場合、これらの蔵骨器は19世紀前葉に位置づけられよう。

Ｃ．鉄製品（第19図、図版28）

第19図26は鉄釘である。断面は方形で、頭部を叩き潰して片側から折り曲げただけのものである。先端付近で折れ曲がり、その先は欠損している。残存長は約８cmである。27は、断面楕円形の鉄製品の断片で、先端が尖る。残存長は2.7cmを測る。性格は不明である。

Ⅴ　まとめ

ここでは、これまで述べてきた調査結果とそこから得られた見解を整理し、本報告のまとめとしたい。

開谷東遺跡は、開谷地区の八幡社境内地及びその周辺の平坦面群の総称である。今年度の調査では、本遺跡の中枢部分であったと想定される現在の社殿位置を中心とした約7,000m²を対象として実施した。その範囲は世界測地系の平面直角座標Ｘ78975～79125、Ｙ22030～22120にあたる。

現在の社殿の乗る平坦面１では、第１トレンチを設定して掘削を行った。その結果、平坦面１の一部は盛土造成によって形成されていることが判明した。また、拝殿前に集積されていた五輪塔について検討を行ない、概ね14世紀～1

6世紀に至るものであること、最も古い大型の水輪は13世紀代まで遡る可能性があることなどが窺われた。

平坦面1の西側下方に位置する平坦面3では、第2トレンチを設定した。ここでは古代～近世の溝・穴を検出したが、これ以外にも複数の遺構が存在することが窺われた。また、須恵器・土師器・珠洲・瀬戸美濃・越中瀬戸など多くの遺物が出土した。数量的には9世紀末～10世紀前半に属するものが圧倒的に多く、本遺跡における人間活動が最も活発だったのはこの時期であったと言える。該期の遺物の内容は、赤彩を含む土師器椀が多いのに対して煮炊具などはほとんど見られず、この地が日常生活の空間ではなく祭祀的・儀礼的な空間であったことを示す。

この9世紀～10世紀という時期は、黒川遺跡群では黒川上山墓跡（黒川塚跡東遺跡）・伝真興寺跡でまとまった量の遺物が出土し始め、黒川一帯が「霊場」としての体制を整えていく時期、つまり成立期にあたる。それと時をほぼ同じくして祭祀的・儀礼的な空間を形成していた本遺跡がその流れと無関係であったとは考えられず、この地にも黒川遺跡群と密接な関わりを有する山岳寺院のような宗教施設が存在していた蓋然性は極めて高い。

また、黒川遺跡群がピークを迎える12世紀～13世紀には、本遺跡では遺物が減少し、それと入れ替わるように多数の五輪塔が出現する。この現象の背景には、霊場の中枢であった黒川遺跡群の発展に伴い、本遺跡を含む周辺の関連施設が統合・再編成され、本遺跡の果たす役割が変化したということが想定される。

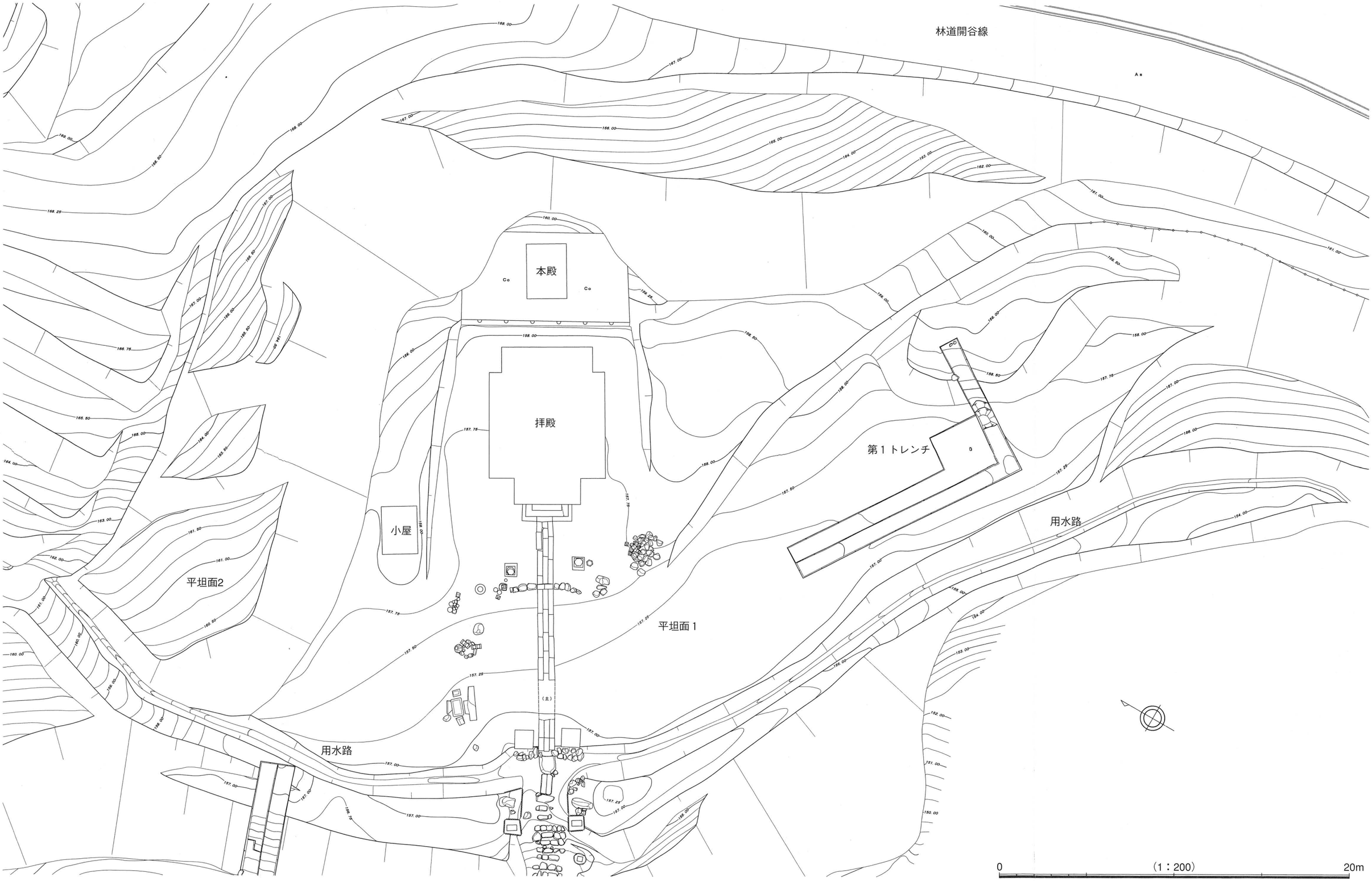
万治3年（1660年）11月に記された「二宮記録」及び「富山県神社庁神社明細書」によると、江戸時代初期には開谷村に観音を祀る神社が存在したという。今回の調査では16世紀後葉の黒川窯産越中瀬戸が多く出土しており、またそれ以降の製品も出土している。この越中瀬戸の存在は、栄禄・天正年間の兵火で灰燼に帰したと伝えられるこの地の復興活動の一端を垣間見せるものと捉えることができる。想像を逞しくするならば、現在の八幡社の御神体である阿弥陀三尊像も、兵火や黒川遺跡群の解体・廃絶によって散逸していたものが、この復興の流れの中でこの地に集められたものであるという推測も可能かもしれない。

以上であるが、今年度調査の最大の成果は、開谷東遺跡を含めたこの開谷地区一帯が、黒川遺跡群の盛衰に大きく関わっていたことがほぼ確実となったという点に集約される。今後も引き続き調査・検討を行なうことで、より具体的な様相が明らかになっていくものであろう。

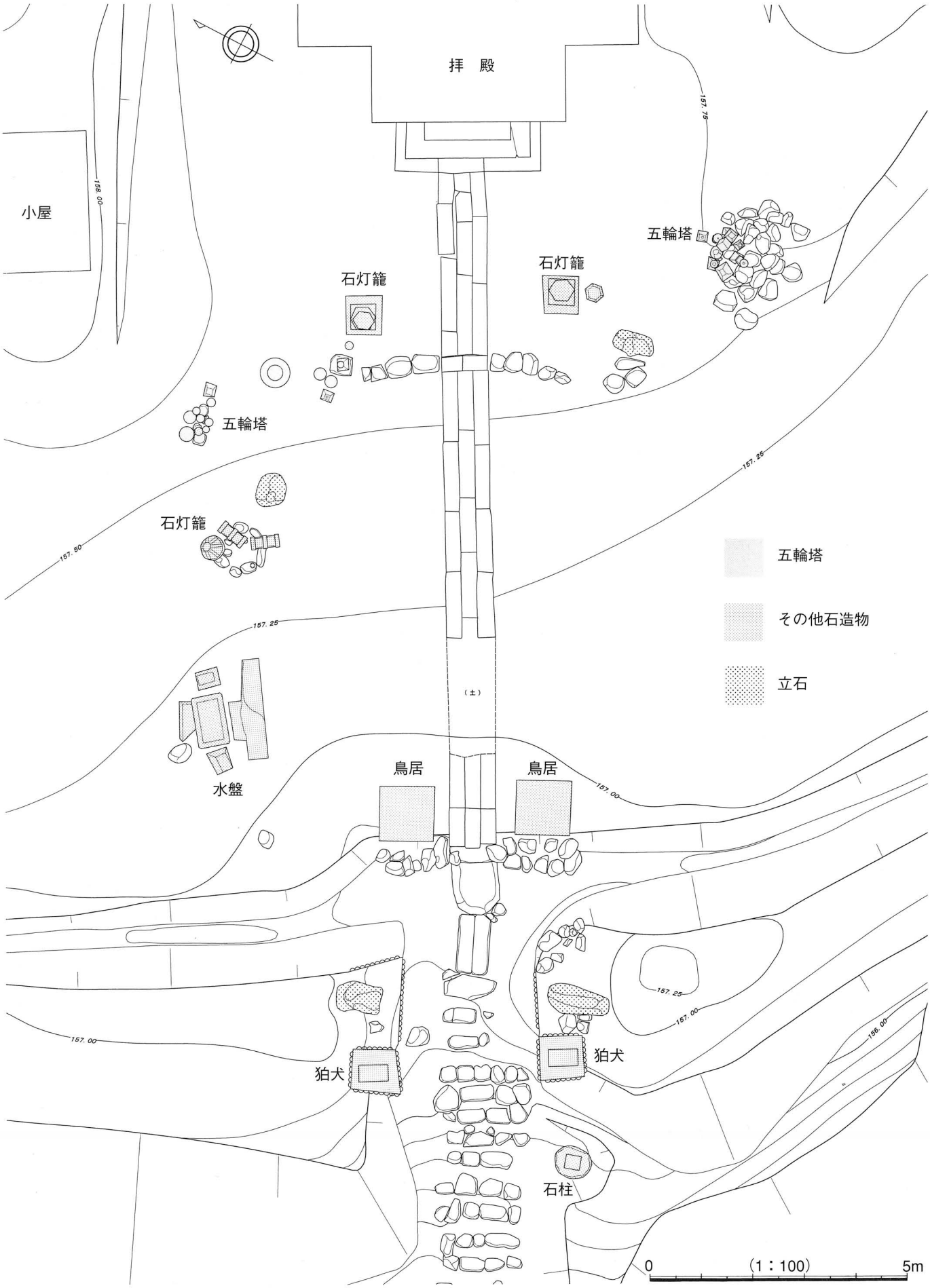
引用・参考文献

ア　青木一彦ほか　1988　「中世の放生津について」『大境』第19号、富山考古学会
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会　1988　『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編
石田茂作　1967　『仏教美術の基本』東京美術
井口村　1992　『井口村史』下巻（資料編）
越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会　1988　『越中瀬戸発祥四百年記念誌』
カ　上市町　1970　『上市町誌』
上市町教育委員会　1995　『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』
上市町教育委員会　1997～2005a　『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第2次～第10次調査概報』
上市町教育委員会　2005b　『富山県上市町黒川遺跡群発掘調査報告書』
京田良志　1976　『富山の石造美術』富山文庫5、巧玄出版
タ　田嶋明人　1988　「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編
富山大学人文学部考古学研究室　1989　『越中上末窯』富山大学考古学研究報告第3冊
富山地学会編　1986　『富山県の地形・地質－自然環境管理計画策定のための調査－』
ハ　福岡町教育委員会　2000　『富山県　福岡町の文化財』
福光町・医王山文化調査委員会　1993　『医王山文化調査報告書　医王は語る』
藤澤良祐　1993　「瀬戸大窯の時代」『瀬戸市史』陶磁史編4、愛知県瀬戸市
藤原良志　1964　「西明寺塚五輪塔」『越中史壇』第28号、越中史壇会
北陸中世考古学研究会　2000　『中世北陸の石塔・石仏』第13回北陸中世考古学研究会資料集
北陸中世土器研究会　1994　『中世北陸の寺院と墓地』第7回北陸中世土器研究会資料集
北陸中世土器研究会編　1997　『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』桂書房
マ　宮田進一　1988　「越中瀬戸の窯資料（1）」『大境』第12号、富山考古学会

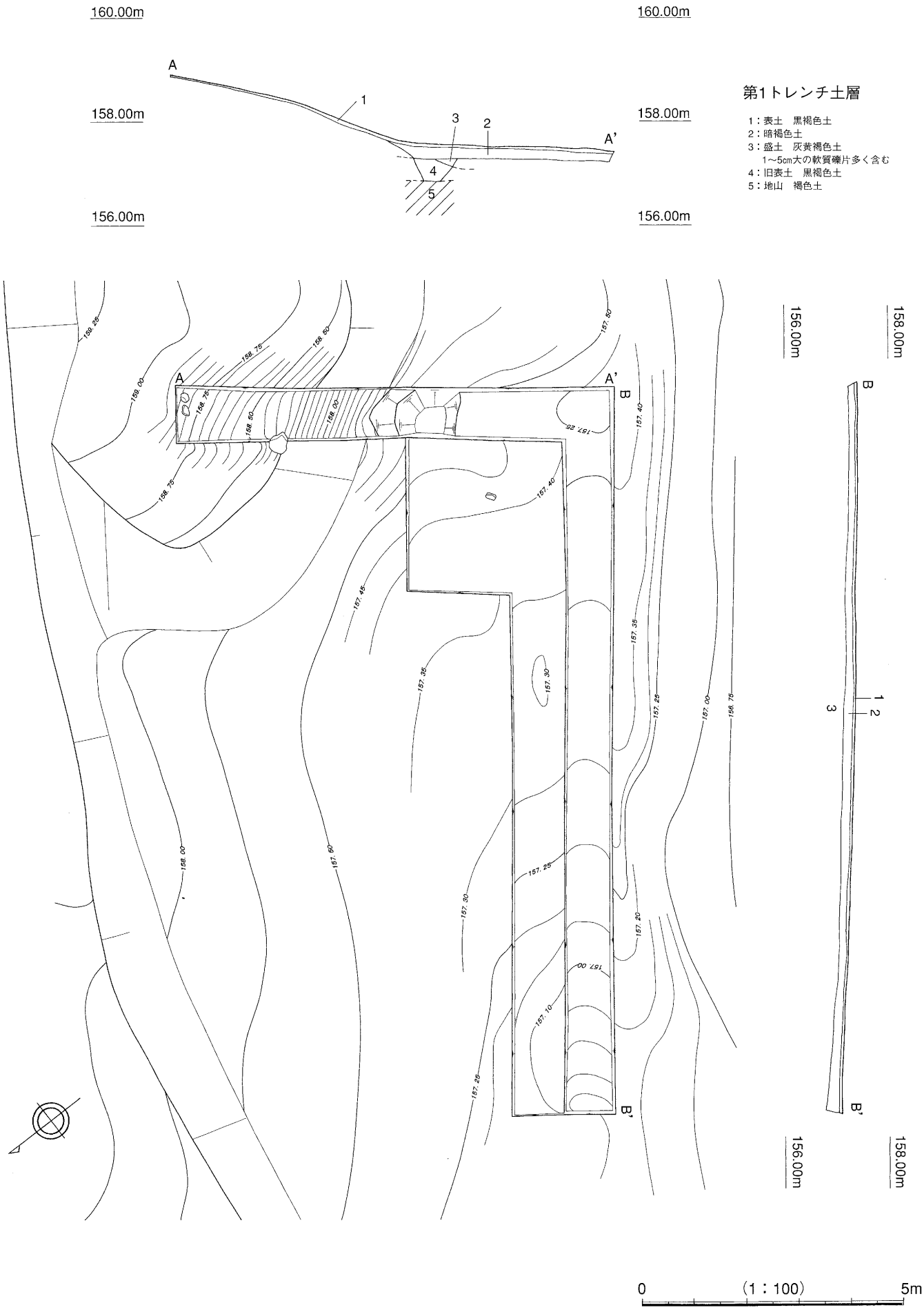
第3図　遺構全体図（縮尺　1／400）



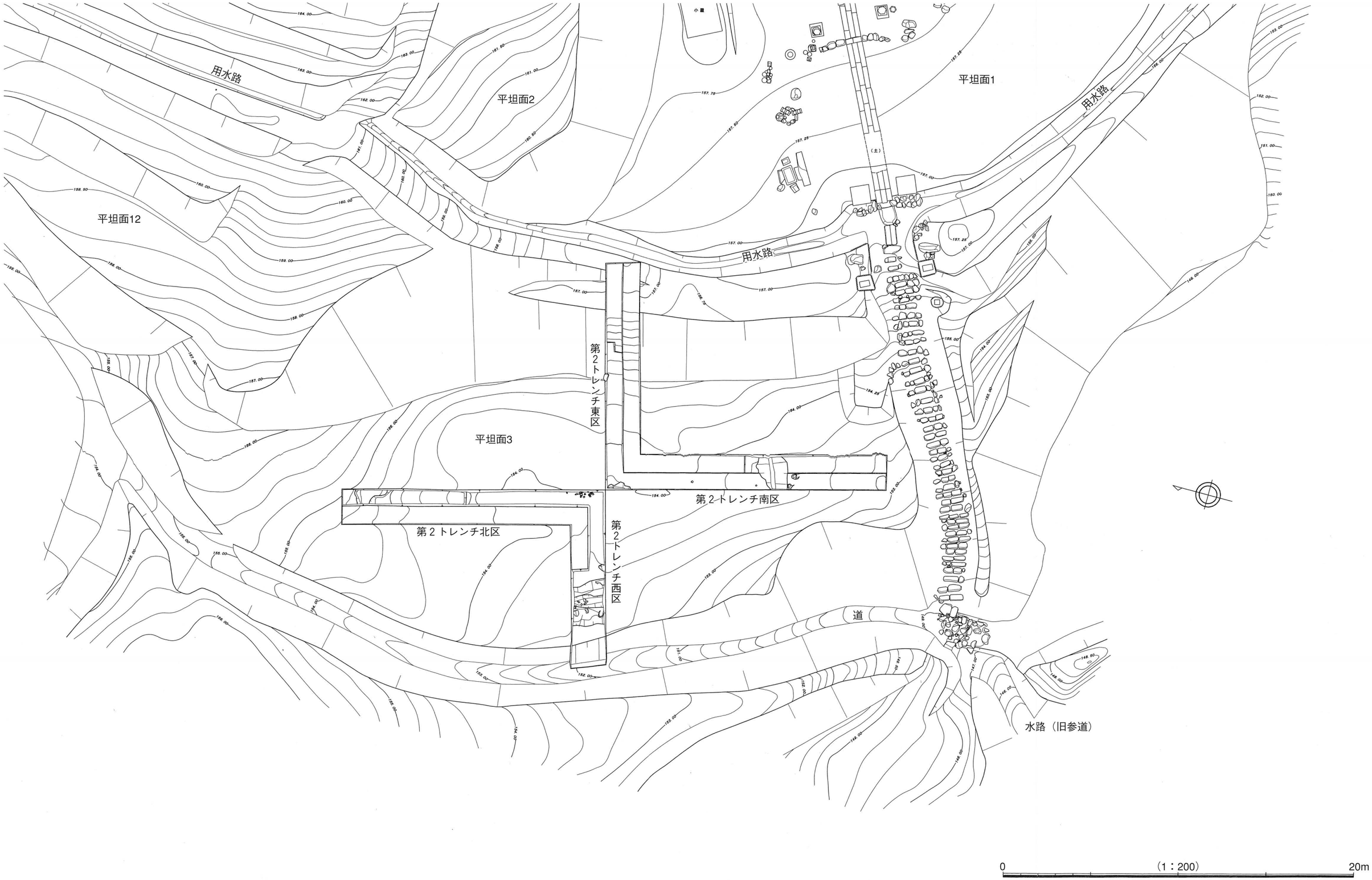
第４図　平坦面１実測図（縮尺　1／200）



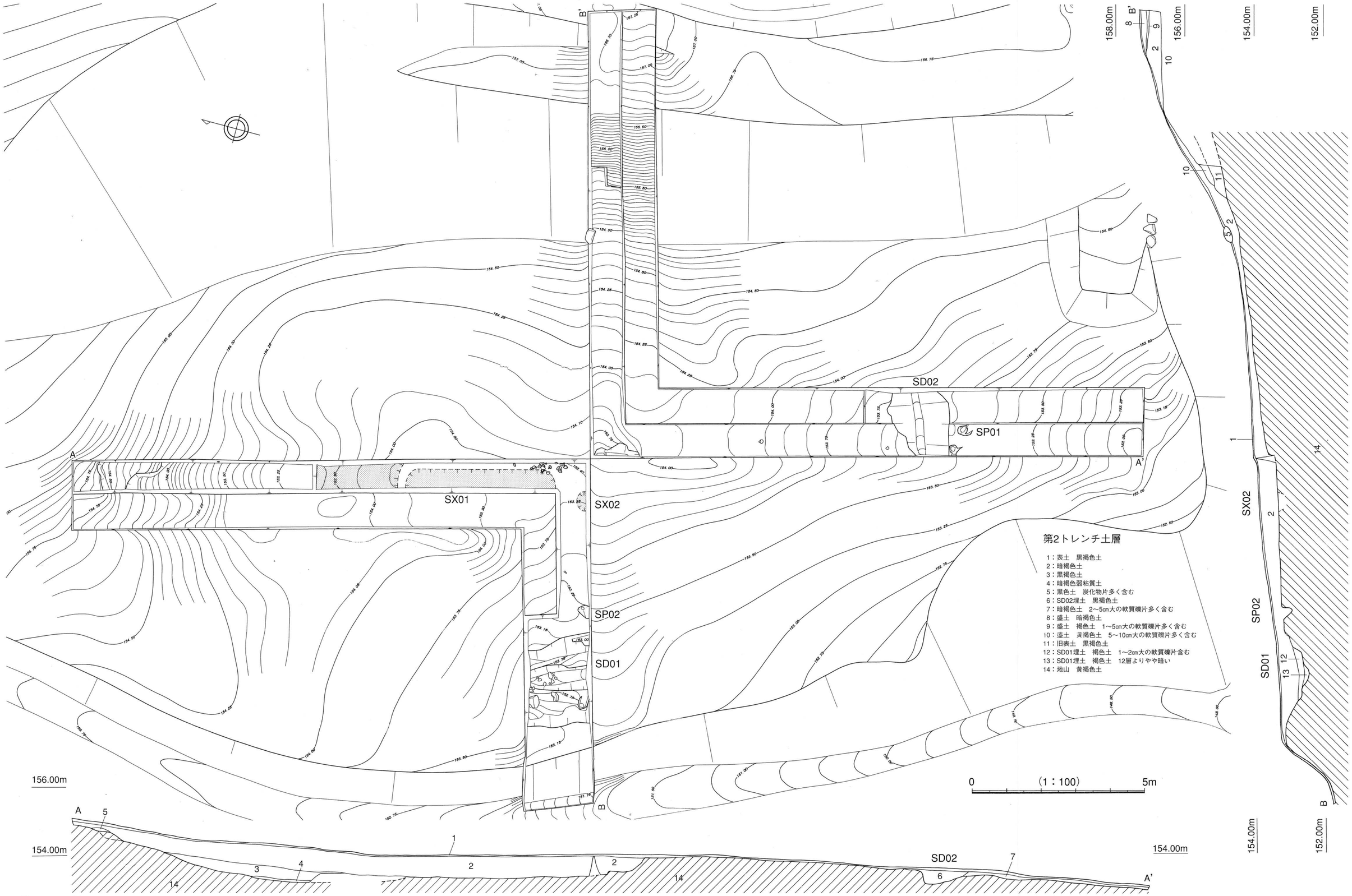
第５図　平坦面１石造物分布図（縮尺　1／100）



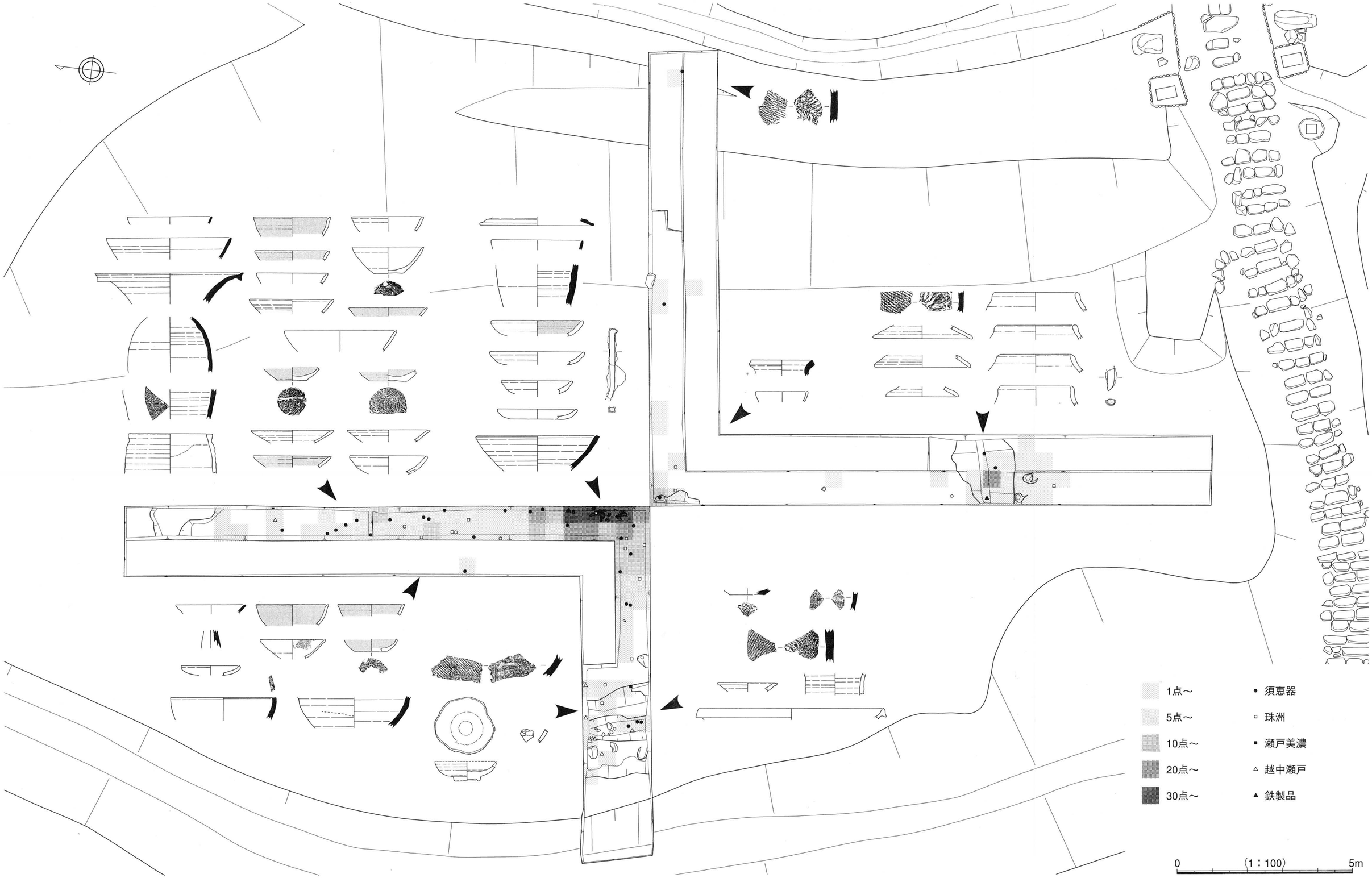
第6図　第1トレンチ実測図（縮尺　1／100）



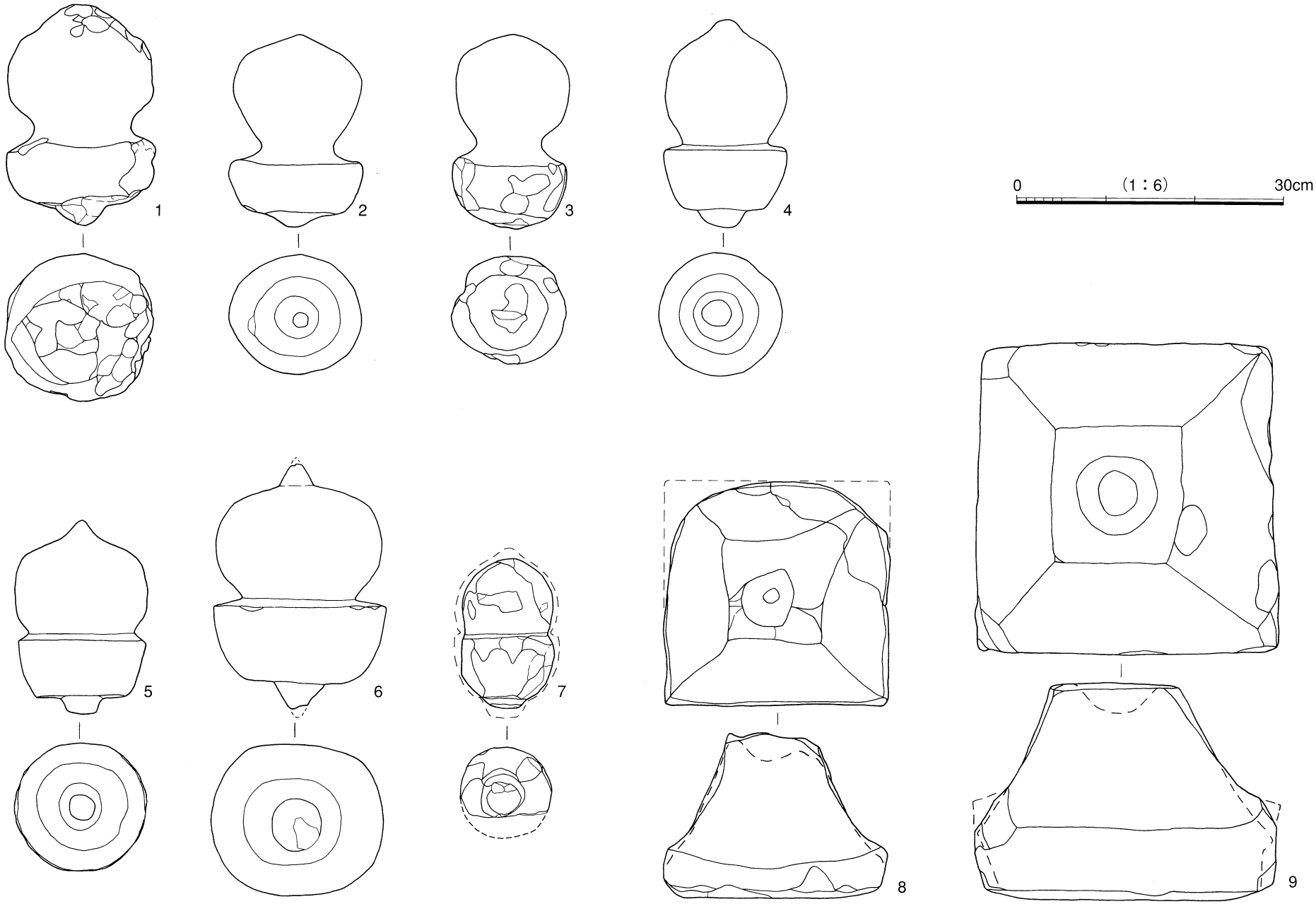
第７図　平坦面３実測図（縮尺　1／200）



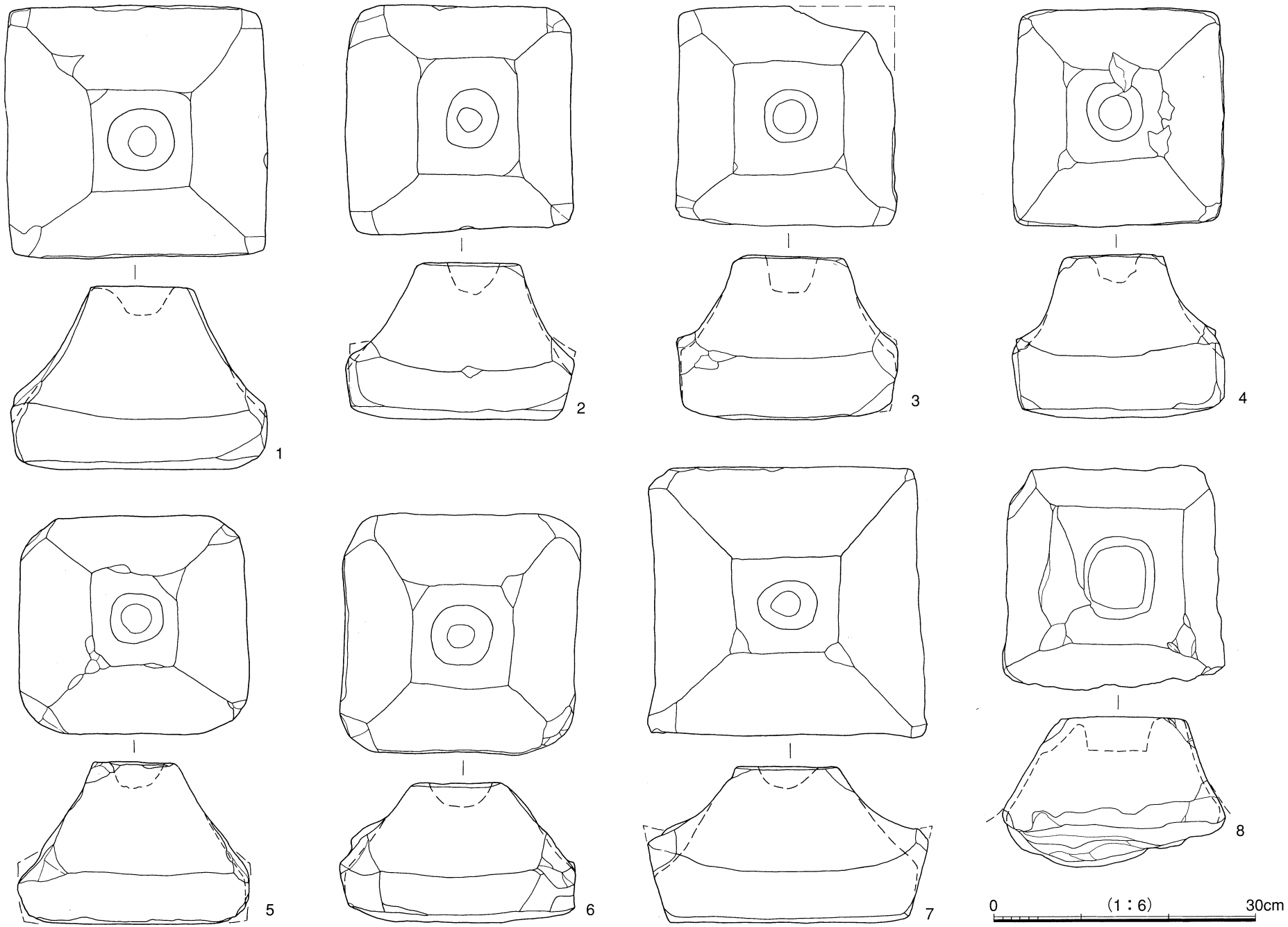
第８図　第２トレンチ実測図（縮尺　1／100）



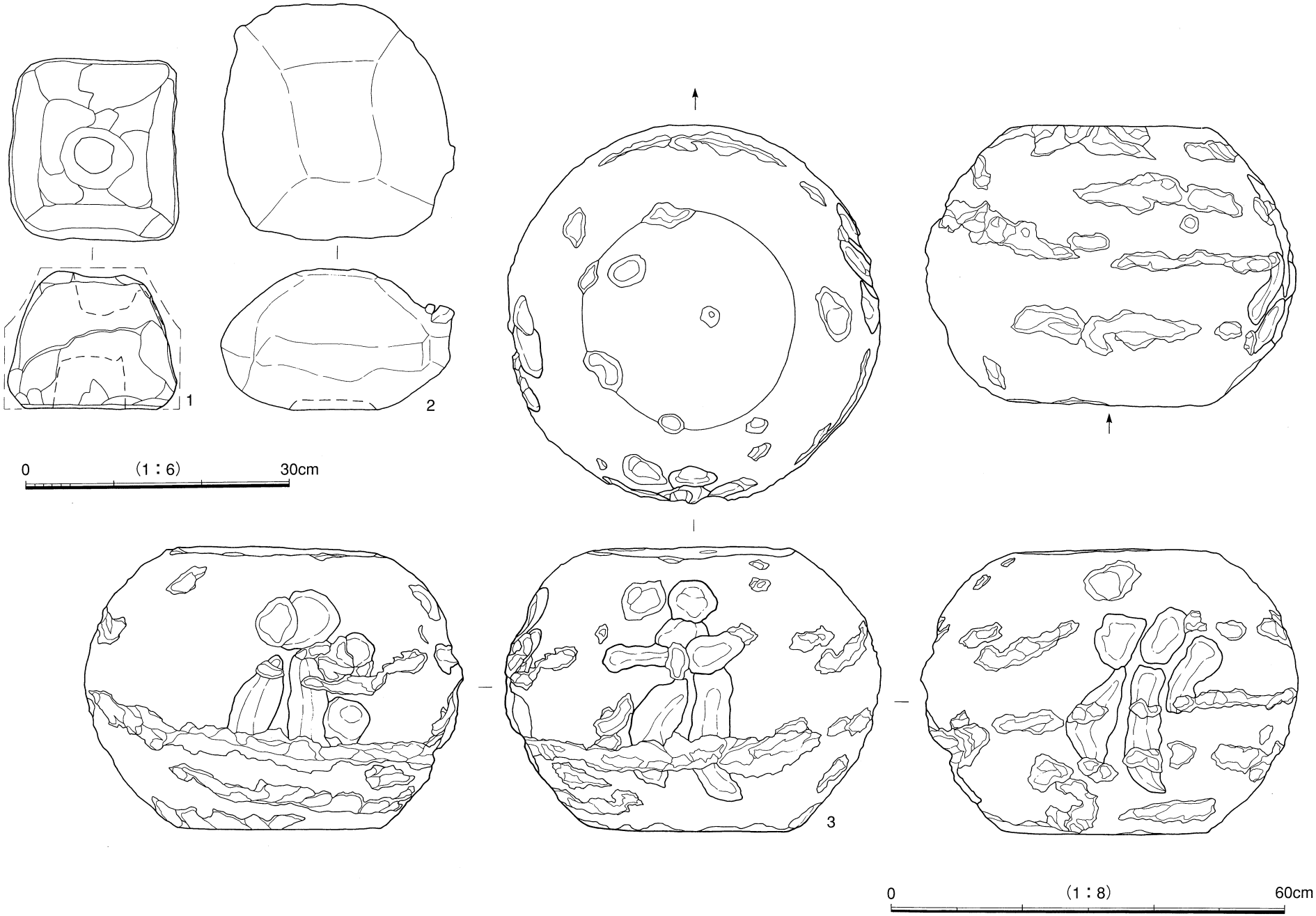
第９図　第２トレンチ遺物分布図（縮尺　1／100）



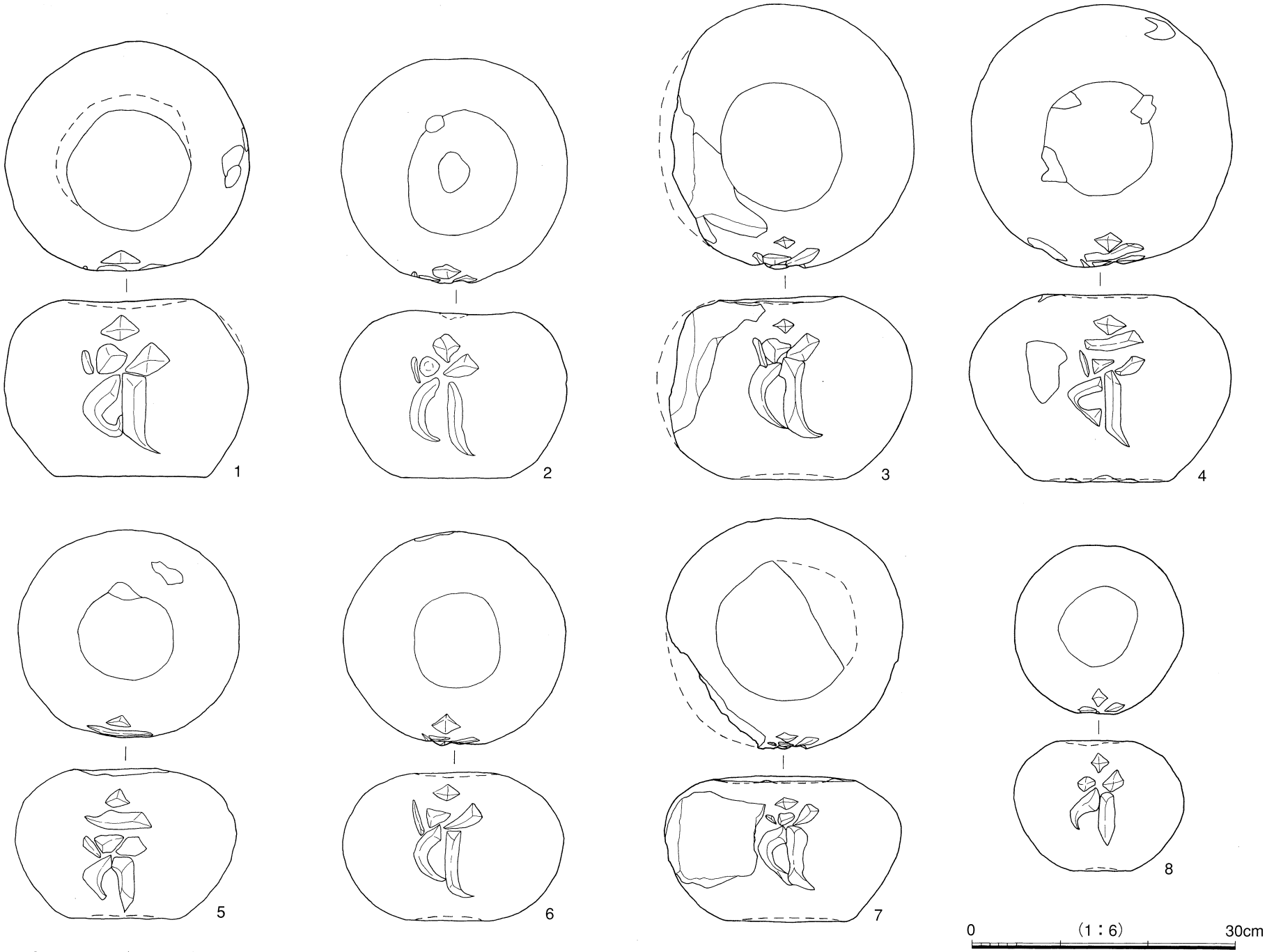
第10図　遺物実測図（縮尺　1／6）　1―9：平坦面1



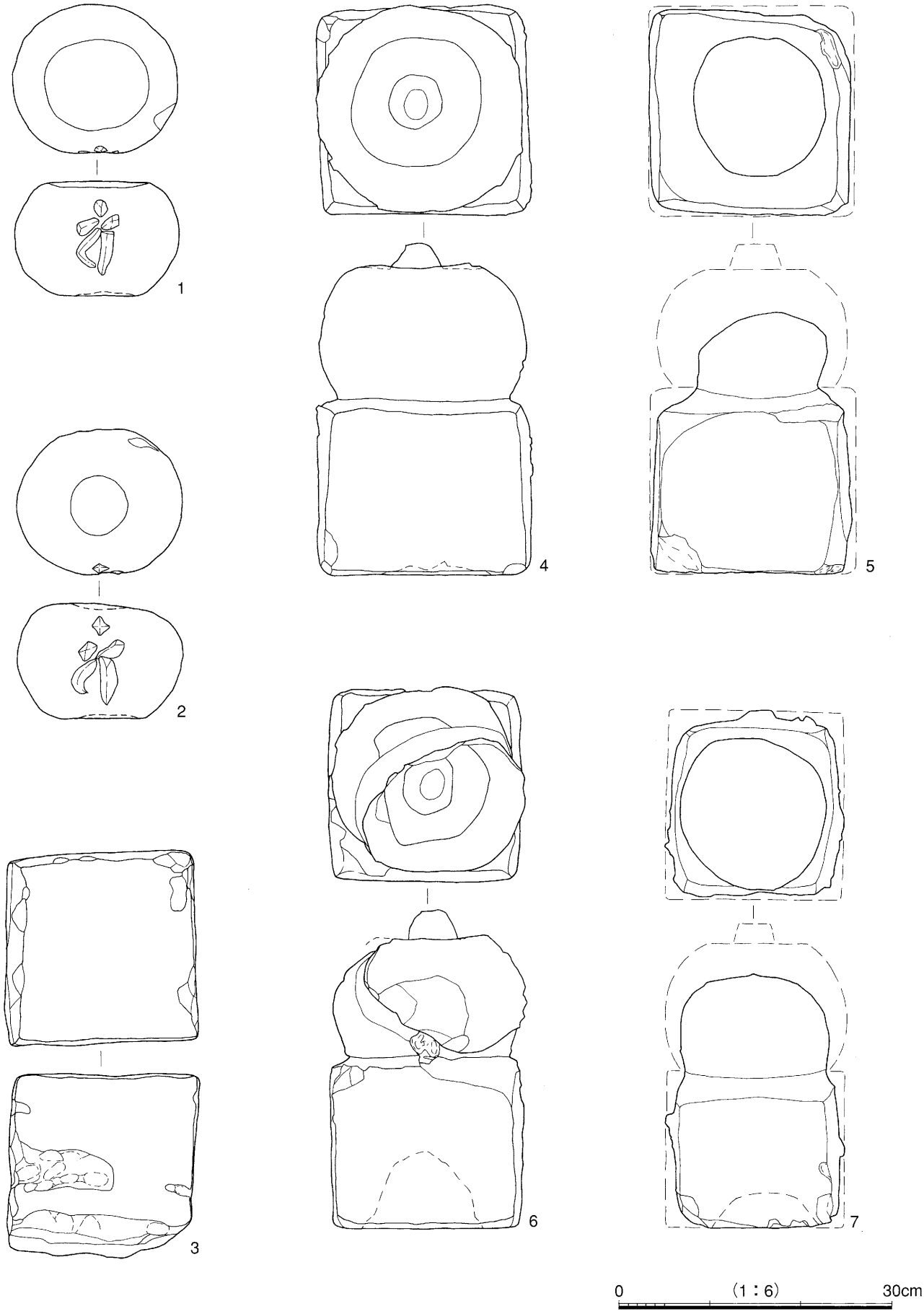
第11図　遺物実測図（縮尺　1／6）　1−8：平坦面1



第12図　遺物実測図（縮尺　1―2：1／6、3：1／8）　1―3平坦面1



第13図　遺物実測図(平面図)(縮尺　1／6)　1—8：平坦面1

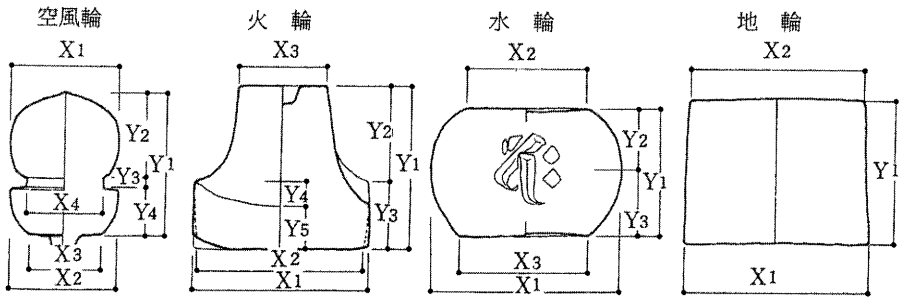


第14図　遺物実測図（縮尺　1／6）　1―7：平坦面1

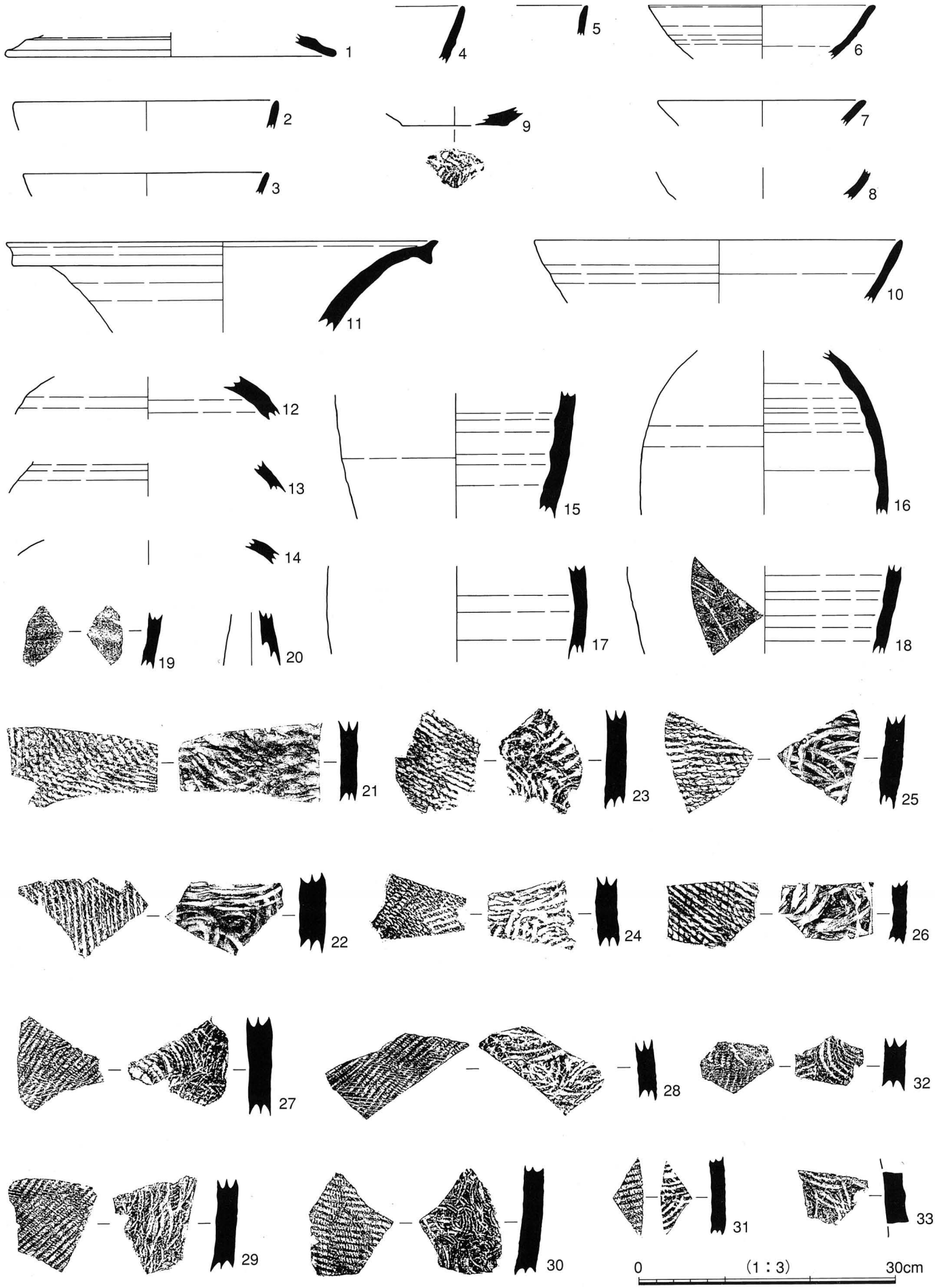
第１表　五輪塔計測表

図	No	部位	石材		幅（cm）				高さ（cm）					高さ/幅	重量(kg)	時期	備　　考
					X 1	X 2	X 3	X 4	Y 1	Y 2	Y 3	Y 4	Y 5				
第10図	1	空風輪	砂岩		16.6	17.0	10.3	11.0	22.8	14.0	－	8.8	－	1.37	7.4	14c	風化
	2	空風輪	砂岩		14.5	15.1	9.7	8.1	20.0	12.8	－	7.2	－	1.38	5.0	14c	風化
	3	空風輪	砂岩		13.0	13.1	8.9	7.4	21.5	12.4	－	9.1	－	1.65	3.6	14c	風化
	4	空風輪	安山岩		13.8	14.0	9.1	9.6	21.5	13.9	－	7.6	－	1.56	5.6	15c	
	5	空風輪	安山岩		15.0	14.4	10.3	11.9	20.0	12.7	－	7.3	－	1.33	5.4	15c	
	6	空風輪	安山岩		18.7	19.6	11.1	12.7	24.9	15.4	－	9.5	－	1.33	9.8	16c	横断面扁平化
	7	空風輪	凝灰岩		10.1	10.5	5.4	9.4	15.9	8.5	－	7.4	－	1.57	1.1	15-16c	風化著しい、欠損
	8	火輪	砂岩		24.9	23.5	10.0	－－	18.0	12.2	5.8	2.6	3.2	0.72	12.2	14c	欠損
	9	火輪	砂岩		33.6	29.2	14.0	－	24.2	13.8	10.4	2.7	7.7	0.72	36.8	14-15c	風化
第11図	1	火輪	安山岩		29.1	27.6	11.6	－	20.6	13.2	7.4	1.9	5.5	0.71	23.4	15c	
	2	火輪	安山岩		26.0	22.6	11.4	－	17.6	10.6	7.0	1.6	5.4	0.68	16.4	15c	
	3	火輪	安山岩		25.0	23.6	12.6	－	18.3	9.4	8.9	2.1	6.8	0.73	15.2	15c	欠損
	4	火輪	安山岩		24.0	22.8	11.0	－	18.4	10.0	8.4	1.4	7.0	0.77	16.2	15c	
	5	火輪	安山岩		26.2	24.8	9.3	－	18.0	12.4	5.6	0.2	5.4	0.69	14.2	15c	
	6	火輪	安山岩		26.8	25.7	10.6	－	15.8	9.4	6.4	1.2	5.2	0.59	15.4	16c	
	7	火輪	安山岩		31.6	26.8	11.8	－	17.6	8.6	9.0	3.2	5.8	0.56	23.1	16c	
	8	火輪	安山岩		25.2	23.7	14.3	－	16.7	9.4	7.3	1.4	5.9	0.66	12.8	15c	欠損
第12図	1	火輪	凝灰岩		19.1	17.6	11.8	－	15.3	－	－	－－	－	0.80	4.4	15-16c	風化著しい、欠損、下底部に穴あり
	2	火輪?	凝灰岩		26.4	－	－	－	15.7	－	－	－	－	0.59	7.2	15-16c	風化著しい
	3	水輪	砂岩		57.2	32.2	30.4	－	43.4	20.2	23.2	－	－	0.76	100<	13-14c	風化著しい、正面「バン」側面「バク」?
第13図	1	水輪	安山岩		27.6	14.1	16.8	－	20.0	10.0	10.0	－	－	0.72	19.8	14c	正面「バン」
	2	水輪	安山岩		25.6	12.2	12.0	－	18.7	8.7	10.0	－	－	0.73	17.7	14c	正面「バン」
	3	水輪	安山岩		27.4	13.7	12.4	－	20.5	9.5	11.0	－	－	0.75	22.2	15c	欠損、正面「バン」
	4	水輪	安山岩		29.6	12.2	15.2	－	20.8	8.8	12.0	－	－	0.70	24.0	15c	正面「バン」
	5	水輪	安山岩		24.9	10.8	12.4	－	16.8	7.8	9.0	－	－	0.67	13.0	15c	正面「バン」
	6	水輪	安山岩		24.9	9.6	9.3	－	16.6	8.2	8.4	－	－	0.67	14.2	16c	正面「バン」
	7	水輪	安山岩		26.7	16.0	13.6	－	16.2	5.9	10.3	－	－	0.61	14.3	16c	欠損、正面「バン」
	8	水輪	安山岩		19.2	8.4	6.5	－	14.6	5.9	8.7	－	－	0.76	7.2	15c	正面「バン」
第14図	1	水輪	安山岩		17.8	11.3	8.9	－	12.5	6.0	6.5	－	－	0.70	5.0	15c	正面「バン」
	2	水輪	安山岩		18.0	6.2	10.4	－	12.5	5.5	7.0	－	－	0.69	4.9	15c	正面「バン」
	3	地輪	砂岩		19.7	19.8	－	－	19.8	－	－	－	－	1.01	15.8	14-15c	風化、欠損
	4	水地輪	凝灰岩	水	22.5	14.1	18.8	－	14.9	8.9	6.0	－	－	0.66	18.4	15-16c	風化、ほぼ完存
				地	22.7	22.0	－	－	19.0	－	－	－	－	0.84			
				総	22.7	－	－	－	33.9	－	－	－	－	1.49			
	5	水地輪	凝灰岩	水	13.9	－	13.0	－	8.2	－	－	－	－	0.59	11.6	15-16c	風化著しい
				地	20.3	20.3	－	－	20.2	－	－	－	－	1.00			
				総	20.3	－	－	－	28.4	－	－	－	－	1.40			
	6	水地輪	凝灰岩	水	21.2	10.3	17.5	－	13.2	7.6	5.6	－	－	0.62	12.6	15-16c	風化、水輪部破損、下底部に穴あり
				地	20.2	20.3	－	－	18.6	－	－	－	－	0.92			
				総	21.2	－	－	－	31.8	－	－	－	－	1.50			
	7	水地輪	凝灰岩	水	16.2	9.8	15.3	－	11.3	5.4	5.9	－	－	0.70	8.1	15-16c	風化著しい、下底部に穴あり
				地	16.9	16.9	－	－	16.1	－	－	－	－	0.95			
				総	16.9	－	－	－	27.4	－	－	－	－	1.62			

※計測値は全て現存値

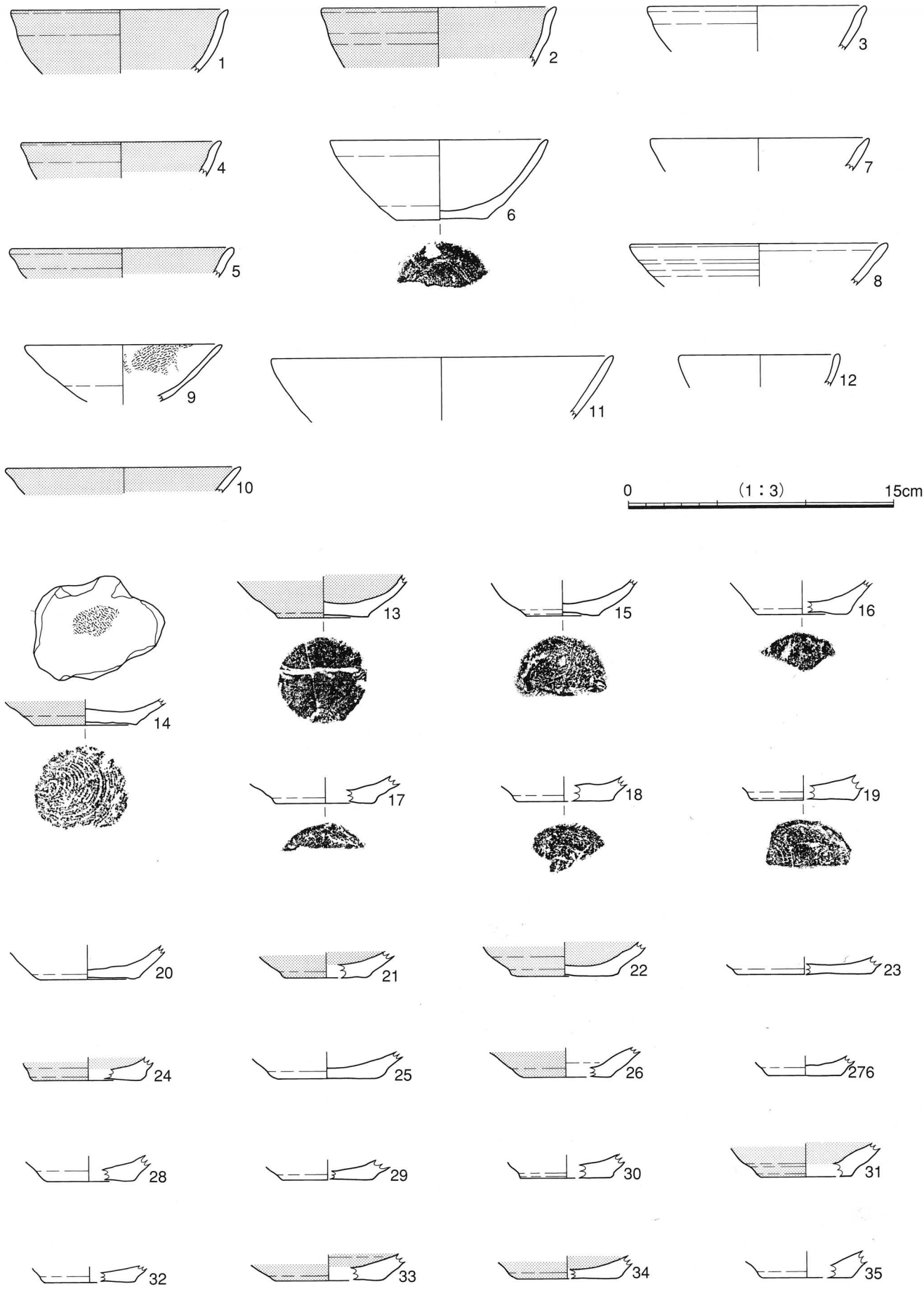


五輪塔各部の計測位置



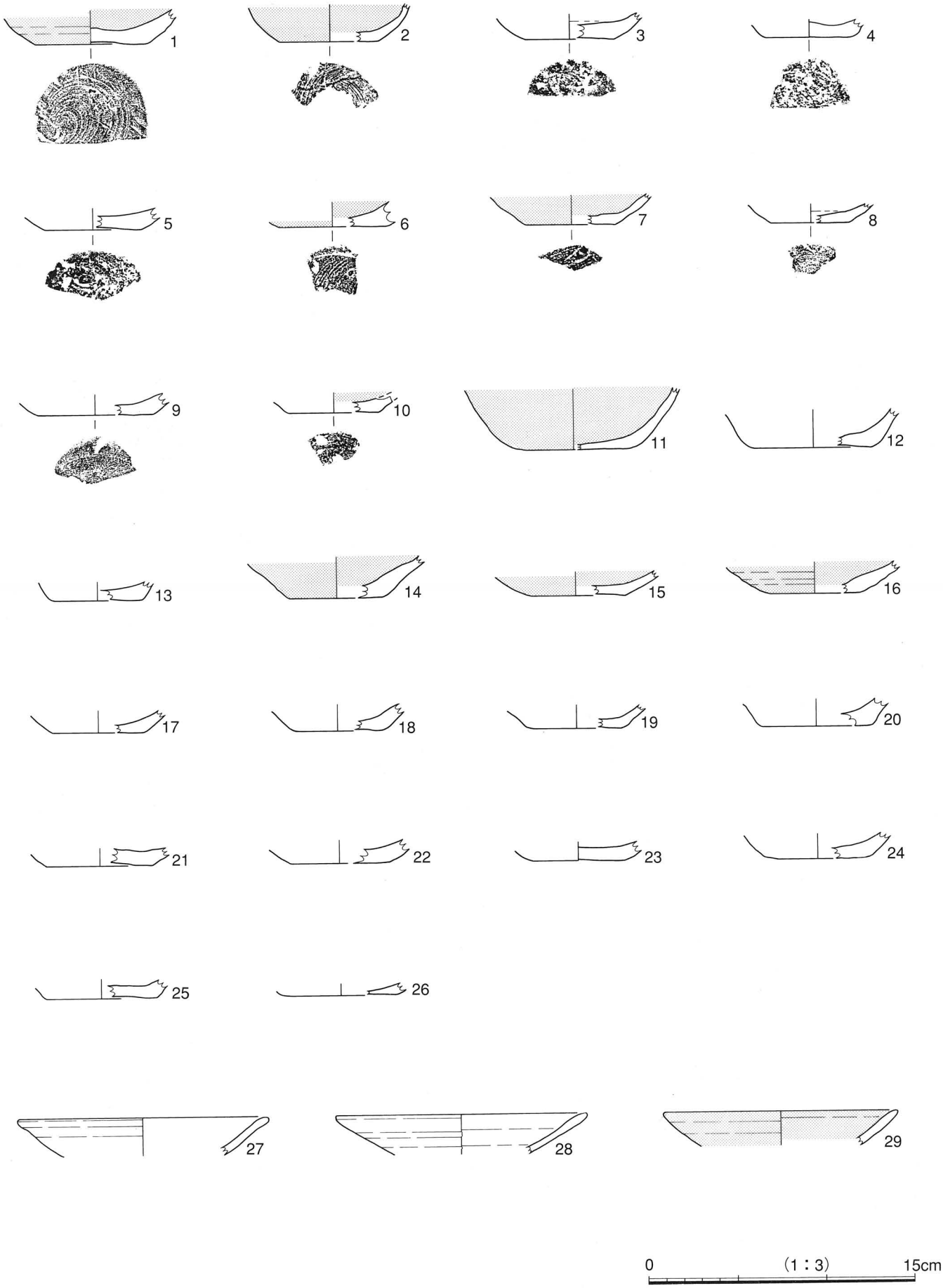
第15図　遺物実測図（縮尺　1／3）

SD01：9・19・27，SD02：26，2T—N：1—5・7・8・10—12・14—18・20—22・24・25・33
2T—W：29・32，2T—S：28，表採：6・13・30

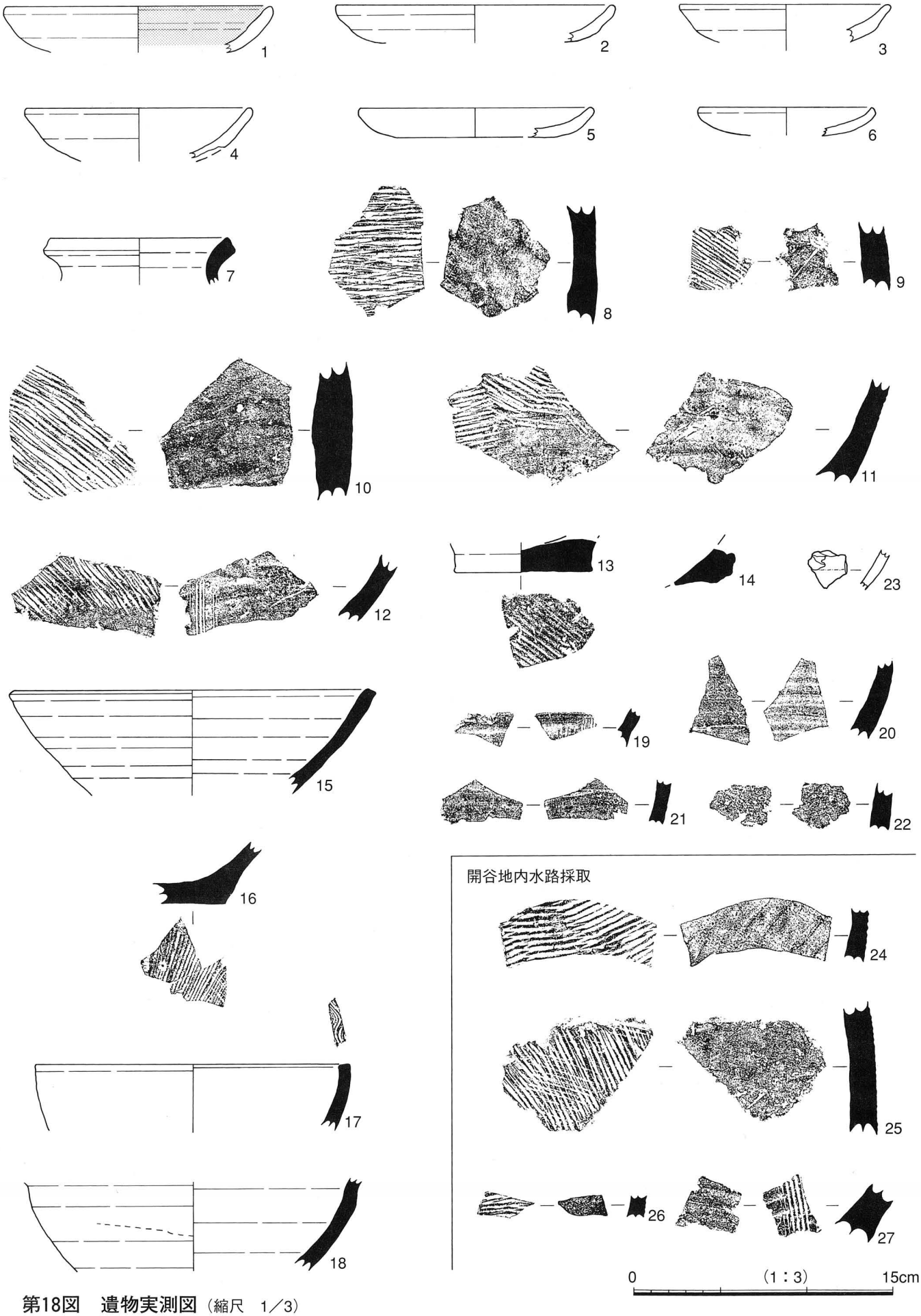


第16図　遺物実測図（縮尺　1／3）

2T—N：1—11・13—17・19—23・26—32・34・35，2T—S：12・18・24・25・33



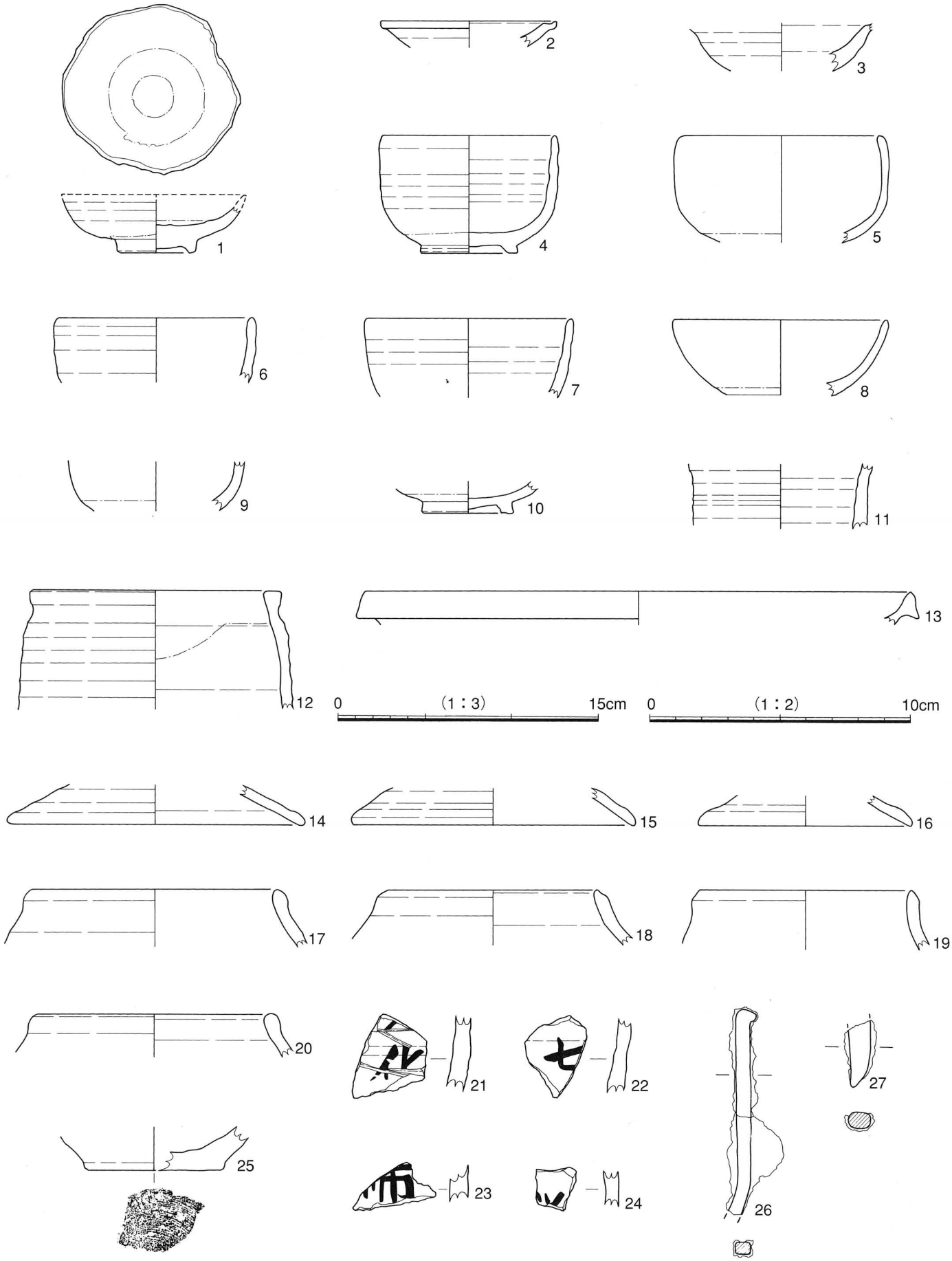
第17図　遺物実測図（縮尺　1／3）
2T—N：1—12・14—29，表採：13



第18図　遺物実測図（縮尺　1／3）

2T—N：1—6・8・13・15—29，2T—W：12・14・21・23，2T—S：7・9・20，表採：10・11・19・22

開谷地内水路：24—27



第19図　遺物実測図（縮尺　1—25：1／3，26・27：1／2）

SD01：11・13，SD02：14・16—23・27，2T—N：12・24—26，2T—W：1—2，2T—S：15

表採：3—10

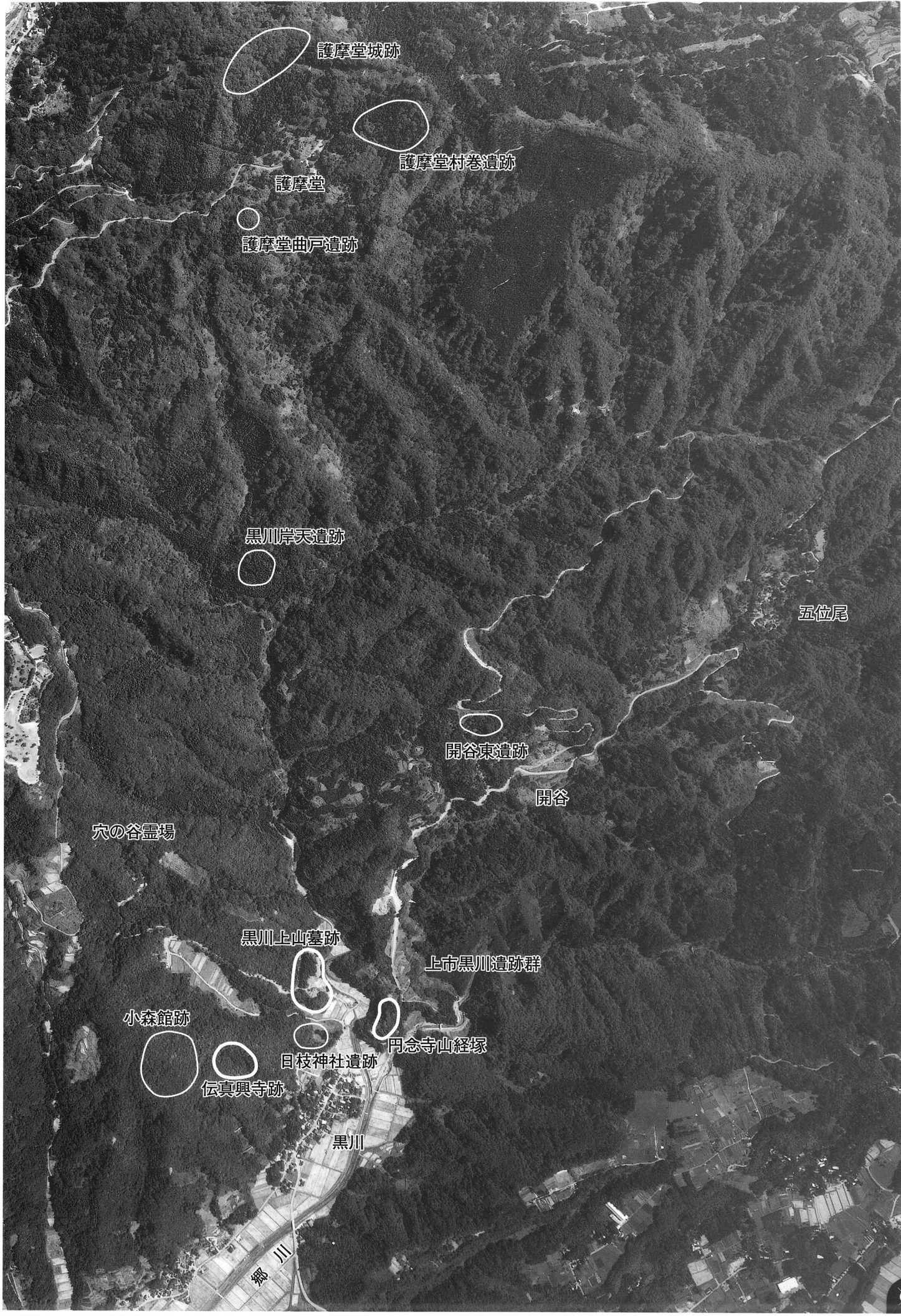
第２表　土器・陶磁器類一覧表

図	No.	出土位置	層位	種類	品種	部位	口径	器高	底径	備　　考
第15図	1	2T-N	2層	須恵器	杯蓋	口縁部	19.0	－	－	
	2	2T-N	2層	須恵器	杯	口縁部	15.0	－	－	還元軟質
	3	2T-N	2層	須恵器	杯	口縁部	14.0	－	－	
	4	2T-N	2層	須恵器	杯	口縁部－体部	－	－	－	還元軟質
	5	2T-N	2層	須恵器	杯	口縁部	－	－	－	
	6	平坦面3	表採	須恵器	椀	口縁部	13.0	－	－	
	7	2T-N	2層	須恵器	椀	口縁部	12.0	－	－	還元軟質
	8	2T-N	2層上面	須恵器	椀	体部	－	－	－	還元軟質
	9	2T-W　SD01	床面直上	須恵器	椀	底部	－	－	6.0	回転糸切り、還元軟質、摩滅
	10	2T-N	3層	須恵器	杯	口縁部	21.0	－	－	
	11	2T-N	3層	須恵器	長頸壺	口縁部	25.0	－	－	
	12	2T-N	3層	須恵器	壺/瓶	肩部	－	－	－	
	13	平坦面1	表採	須恵器	壺/瓶	肩部	－	－	－	
	14	2T-N	2層	須恵器	壺/瓶	肩部	－	－	－	焼き膨れ
	15	2T-N	2層	須恵器	壺/瓶	体部	－	－	－	
	16	2T-N	2層	須恵器	壺/瓶	肩部－体部	－	－	－	
	17	2T-N	2層	須恵器	壺/瓶	体部	－	－	－	
	18	2T-N	2層	須恵器	壺/瓶	体部	－	－	－	外面ヘラ描き?
	19	2T-W　SD01	12層	須恵器	壺/瓶	体部	－	－	－	
	20	2T-N	2層	須恵器	浄瓶/水瓶	頸部	－	－	－	
	21	2T-N	2層	須恵器	甕	体部	－	－	－	内面摩滅
	22	2T-N	2層	須恵器	甕	体部	－	－	－	
	23	2T-E	8層	須恵器	甕	体部	－	－	－	
	24	2T-N	2層	須恵器	甕	体部	－	－	－	
	25	2T-N	2層	須恵器	甕	体部	－	－	－	
	26	2T-S　SD02	6層上面	須恵器	甕	体部	－	－	－	
	27	2T-W　SD01	床面直上	須恵器	甕	体部	－	－	－	摩滅
	28	2T-S	2層	須恵器	甕	体部	－	－	－	酸化硬質
	29	2T-W	2層	須恵器	甕	体部	－	－	－	酸化硬質
	30	石段下方水路	表採	須恵器	甕	体部	－	－	－	酸化硬質
	31	2T-E	2層	須恵器	甕	体部	－	－	－	
	32	2T-W	2層	須恵器	甕	体部	－	－	－	
	33	2T-N	2層上面	須恵器	甕	体部	－	－	－	外面欠損
第16図	1	2T-N	2層	土師器	椀	口縁部－体部	12.0	－	－	内外面赤彩
	2	2T-N	3層	土師器	椀	口縁部－体部	13.0	－	－	内外面赤彩
	3	2T-N	3層	土師器	椀	口縁部	12.0	－	－	
	4	2T-N	2層	土師器	椀	口縁部	11.0	－	－	内外面赤彩
	5	2T-N	2層	土師器	椀	口縁部	12.0	－	－	内外面赤彩
	6	2T-N	2層	土師器	椀	口縁部－底部	12.2	4.5	5.0	回転糸切り
	7	2T-N	2層	土師器	椀	口縁部	12.2	－	－	
	8	2T-N	3層	土師器	椀	口縁部	14.3	－	－	
	9	2T-N	2層	土師器	椀	口縁部－体部	11.0	－	－	内面タール付着
	10	2T-N	3層	土師器	椀	口縁部	13.0	－	－	内外面赤彩
	11	2T-N	3層	土師器	椀	口縁部	19.0	－	－	
	12	2T-S	2層	土師器	椀	口縁部	9.0	－	－	
	13	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	回転糸切り、内外面赤彩
	14	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.7	回転糸切り、外面赤彩、内面タール付着
	15	2T-N	3層	土師器	椀	底部	－	－	4.0	回転糸切り
	16	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	回転糸切り
	17	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.5	回転糸切り
	18	2T-S	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.5	回転糸切り
	19	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.5	回転糸切り
	20	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	
	21	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	4.5	内外面赤彩
	22	2T-N	3層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	内外面赤彩
	23	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	7.5	
	24	2T-S	1層	土師器	椀	底部	－	－	6.0	内外面赤彩
	25	2T-S	2層	土師器	椀	底部	－	－	6.0	
	26	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	外面赤彩
	27	2T-N	3層	土師器	椀	底部	－	－	4.0	
	28	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	
	29	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	
	30	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	
	31	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	内外面赤彩
	32	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	
	33	2T-S	2層	土師器	椀	底部	－	－	6.0	内外面赤彩
	34	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.5	内外面赤彩
	35	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	
第17図	1	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	6.2	回転糸切り、内外面赤彩
	2	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.5	回転糸切り、内外面赤彩
	3	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	回転糸切り
	4	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	4.5	回転糸切り
	5	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.5	回転糸切り
	6	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	6.0	回転糸切り、内外面赤彩
	7	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	回転糸切り、内外面赤彩
	8	2T-N	3層	土師器	椀	底部	－	－	4.5	回転糸切り
	9	2T-N	3層	土師器	椀	底部	－	－	6.5	回転糸切り
	10	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	回転糸切り、内面赤彩
	11	2T-N	3層	土師器	椀	体部－底部	－	－	5.0	内外面赤彩

図	No	出土位置	層位	種類	品種	部位	口径	器高	底径	備　　考
第17図	12	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	6.5	
	13	平坦面1	表採	土師器	椀	底部	－	－	5.0	
	14	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	内外面赤彩
	15	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.5	内外面赤彩
	16	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	内外面赤彩
	17	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	
	18	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	
	19	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	
	20	2T-N	3層	土師器	椀	底部	－	－	6.0	
	21	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	6.0	
	22	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	5.5	
	23	2T-N	1層	土師器	椀	底部	－	－	5.0	
	24	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	6.0	
	25	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	6.0	
	26	2T-N	2層	土師器	椀	底部	－	－	6.0	
	27	2T-N	3層	土師器	Ⅲ	口縁部－体部	14.0	－	－	
	28	2T-N	3層	土師器	Ⅲ	口縁部－体部	13.9	－	－	
	29	2T-N	3層	土師器	Ⅲ	口縁部－体部	13.0	－	－	内外面赤彩
第18図	1	2T-N	2層	土師器	Ⅲ	口縁部－体部	15.0	－	－	内面赤彩
	2	2T-N	2層	土師器	Ⅲ	口縁部－体部	15.9	－	－	
	3	2T-N	2層	土師器	Ⅲ	口縁部－体部	12.0	－	－	
	4	2T-N	2層	土師器	Ⅲ	口縁部－体部	12.8	－	－	
	5	2T-N	2層	土師器	Ⅲ	口縁部－底部	13.5	1.7	9.0	
	6	2T-N	2層	土師器	Ⅲ	口縁部－体部	9.8	－	－	
	7	2T-S	2層	珠洲	壺	口縁部	11.0	－	－	
	8	2T-N	2層	珠洲	壺/甕	体部	－	－	－	
	9	2T-S	2層	珠洲	壺/甕	体部	－	－	－	
	10	平坦面1	表採	珠洲	壺/甕	体部	－	－	－	
	11	平坦面1	表採	珠洲	壺/甕	体部	－	－	－	
	12	2T-W	2層	珠洲	壺/甕	体部	－	－	－	内面に卸目状の櫛描あり
	13	2T-N	2層	珠洲	壺/甕	底部	－	－	7.6	静止糸切り
	14	2T-W	2層	珠洲	壺/甕	底部	－	－	－	外面欠損
	15	2T-N・W	2層	珠洲	片口鉢	口縁部－体部	21.0	－	－	
	16	2T-N	2層	珠洲	片口鉢	底部	－	－	－	静止糸切り、15の底部か
	17	2T-N	2層	珠洲	片口鉢	口縁部	18.0	－	－	口縁端部に櫛描波状文
	18	2T-N	2層	珠洲	片口鉢	体部	－	－	－	体部外面に重ね焼きの痕跡
	19	石段横	表採	珠洲	片口鉢	体部	－	－	－	卸目12目/2.4cm
	20	2T-S	7層	珠洲	片口鉢	体部	－	－	－	
	21	2T-W	2層	珠洲	片口鉢	体部	－	－	－	
	22	石段下方水路	表採	珠洲	片口鉢	体部	－	－	－	
	23	2T-W	2層	瀬戸美濃	碗	体部	－	－	－	鉄釉
	24	開谷地内水路	表採	珠洲	壺/甕	体部	－	－	－	
	25	開谷地内水路	表採	珠洲	壺/甕	体部	－	－	－	
	26	開谷地内水路	表採	珠洲	壺/甕	体部	－	－	－	
	27	開谷地内水路	表採	珠洲	片口鉢	体部	－	－	－	卸目7目/1.5cm
第19図	1	2T-W	1層	越中瀬戸	丸皿	ほぼ完形	10.5	3.4	3.8	鉄釉、見込み蛇の目釉剥ぎ、削り出し輪高台
	2	2T-W	2層	越中瀬戸	折縁皿	口縁部－体部	10.0	－	－	灰釉、黒川窯
	3	平坦面3	表採	越中瀬戸	折縁皿	体部	－	－	－	灰釉、黒川窯
	4	平坦面3	表採	越中瀬戸	丸碗	口縁部－底部	9.8	6.8	5.5	鉄釉、削り出し輪高台
	5	石段下方水路	表採	越中瀬戸	丸碗	口縁部－体部	11.0	－	－	鉄釉、黒川窯
	6	平坦面3	表採	越中瀬戸	丸碗	口縁部	11.0	－	－	鉄釉
	7	平坦面1	表採	越中瀬戸	丸碗	口縁部－体部	11.7	－	－	鉄釉、黒川窯
	8	平坦面3	表採	越中瀬戸	丸碗	口縁部－体部	12.0	－	－	鉄釉
	9	石段下方水路	表採	越中瀬戸	丸碗	体部	－	－	－	鉄釉
	10	石段下方水路	表採	越中瀬戸	碗	底部	－	－	5.1	鉄釉、削り出し輪高台
	11	2T-W　SD01	12層	越中瀬戸	瓶	体部	－	－	－	鉄釉/錆釉、黒川窯
	12	2T-N	2層	越中瀬戸	建水	口縁部	14.0	－	－	鉄釉、黒川窯
	13	2T-W　SD01	2層	越中瀬戸	擂鉢	口縁部	31.0	－	－	錆釉、黒川窯
	14	2T-S　SD02	6層	土師器	蓋	口縁部－体部	17.0	－	－	蔵骨器蓋
	15	2T-S	7層	土師器	蓋	口縁部－体部	16.0	－	－	蔵骨器蓋
	16	2T-S　SD02	6層	土師器	蓋	口縁部－体部	12.0	－	－	蔵骨器蓋
	17	2T-S　SD02	6層	土師器	壺	口縁部	14.0	－	－	蔵骨器
	18	2T-S　SD02	6層	土師器	壺	口縁部	13.0	－	－	蔵骨器
	19	2T-S　SD02	6層上面	土師器	壺	口縁部	12.0	－	－	蔵骨器
	20	2T-S　SD02	6層	土師器	壺	口縁部	12.0	－	－	蔵骨器
	21	2T-S　SD02	6層	土師器	壺	体部	－	－	－	蔵骨器、墨書「化」
	22	2T-S　SD02	6層	土師器	壺	体部	－	－	－	蔵骨器、墨書「七」
	23	2T-S　SD02	6層	土師器	壺	体部	－	－	－	蔵骨器、墨書「柿」？
	24	2T-N	2層	土師器	壺	体部	－	－	－	蔵骨器、墨書「ツ」
	25	2T-N	2層	土師器	壺	体部	－	－	－	蔵骨器、回転糸切り
	26	2T-N	2層	鉄製品	角釘		－	－	－	断面方形、先端欠損
	27	2T-S　SD02	床面直上	鉄製品	不明		－	－	－	断面楕円形、先端尖る

※単位はcm

第20図　柿木平地区平坦面実測図（縮尺　1／500）



図版 1　周辺航空写真（平成 8 年撮影，左が北）

図版 2　遺構写真

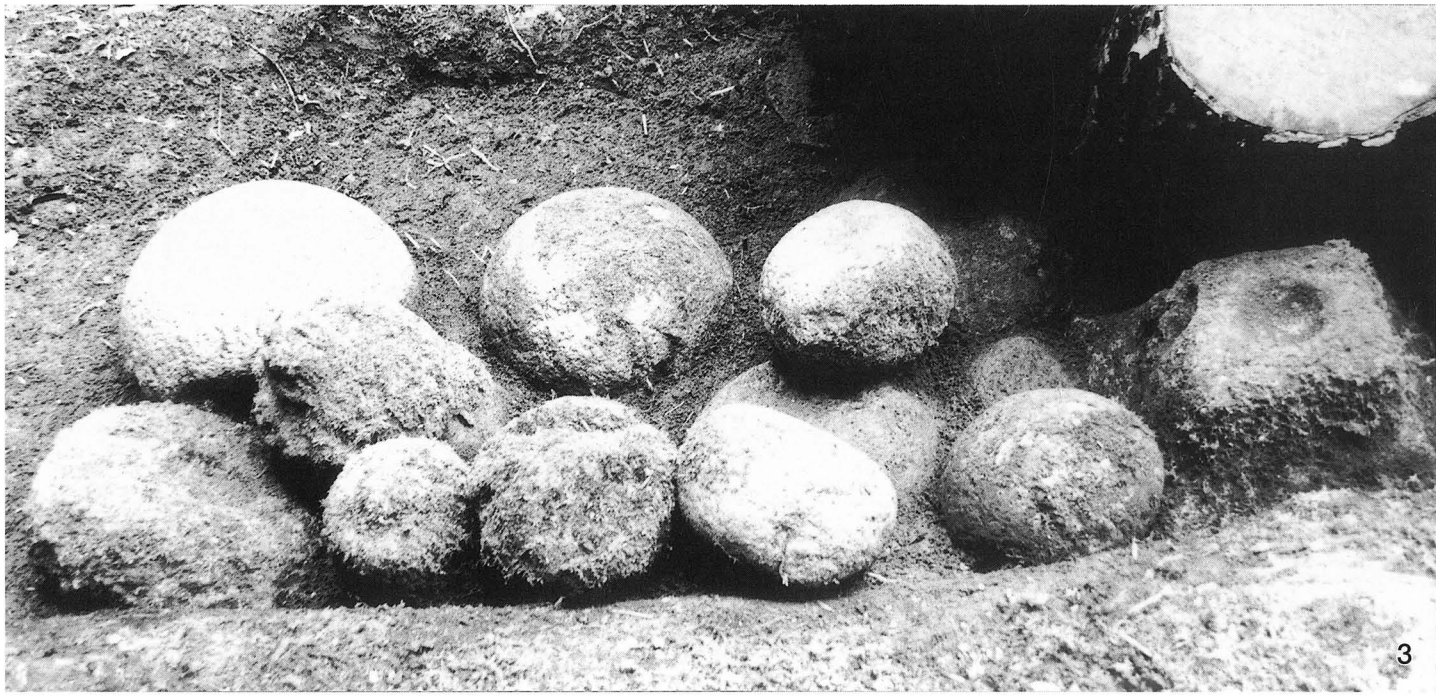
1―2：開谷八幡社（南西より）

図版 3　遺構写真

1―4：開谷八幡社の御神体

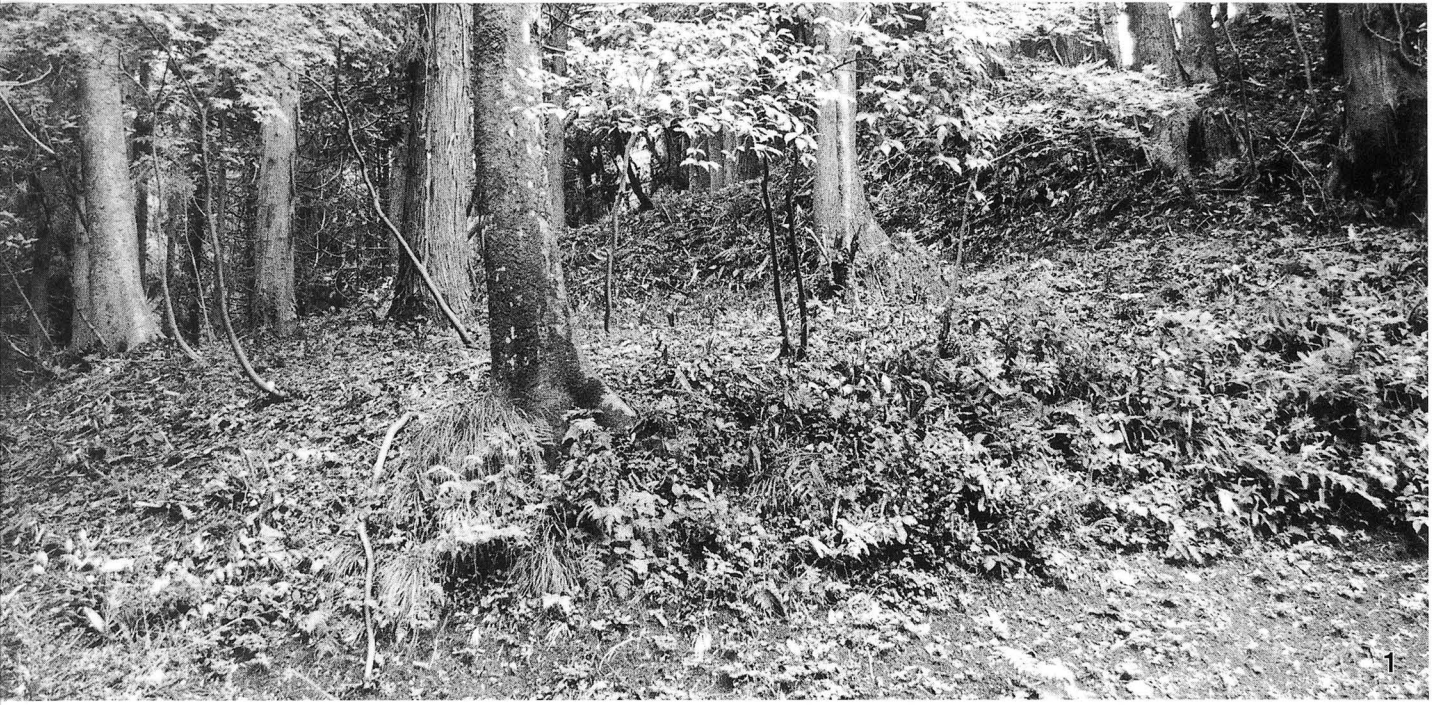
図版４　遺構写真

１：平坦面1（北西より），２：同（南東より），３：平坦面1の基壇状の高まり（北西より）



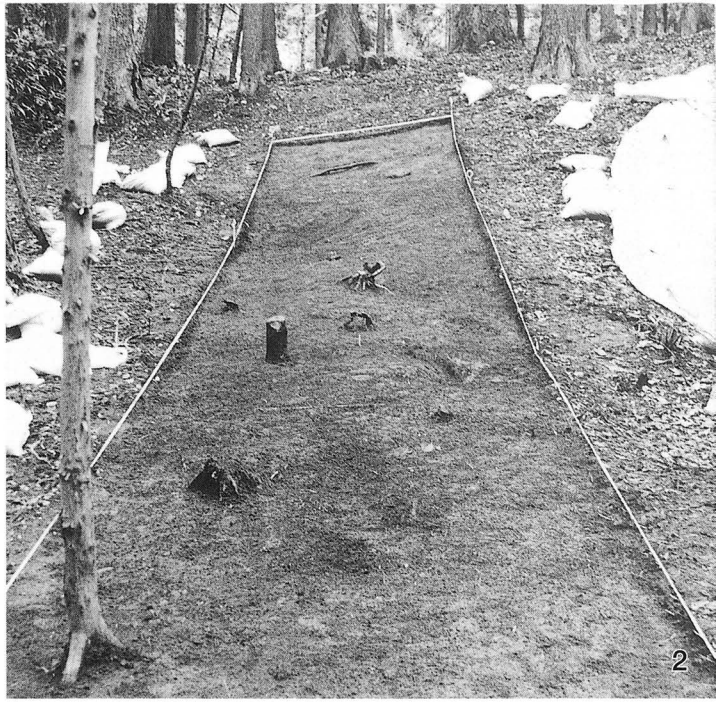
図版５　遺構写真

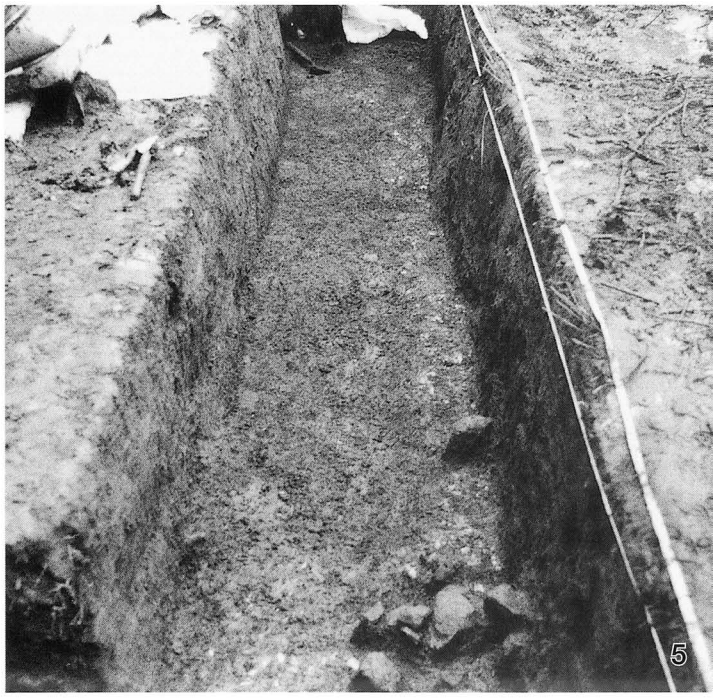
１：平坦面１の五輪塔集積（北より），２：同（西より），３：同（南より）



図版6　遺構写真

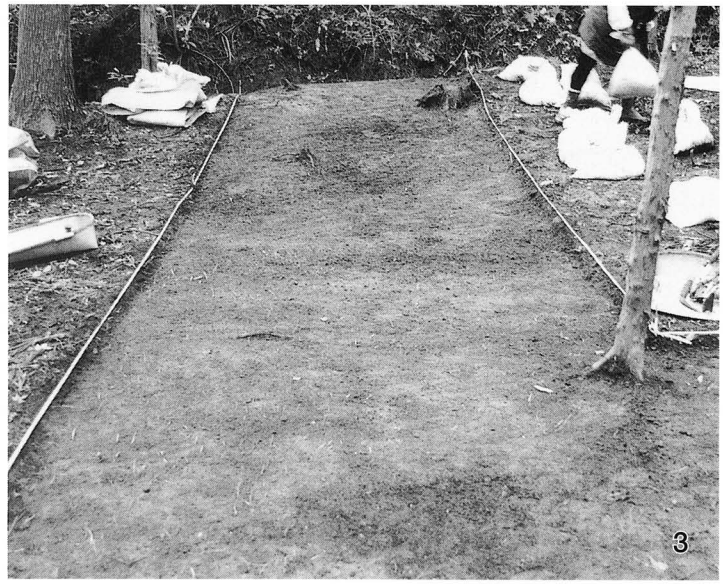
1：平坦面2（南より），2：平坦面3（南東より），3：同（北より）





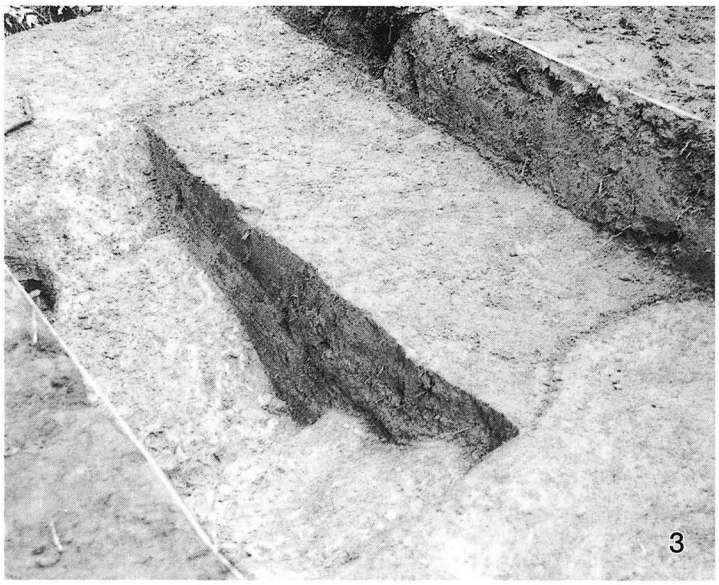
図版７　遺構写真

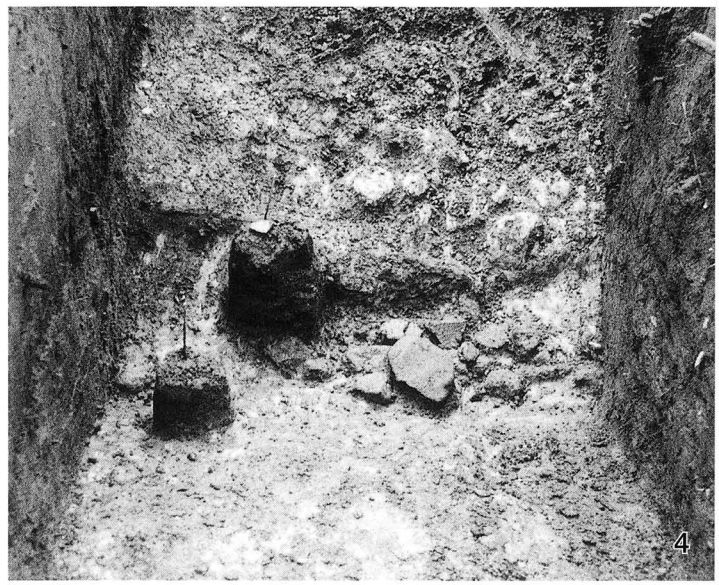
１：第2トレンチ北区（南より），２：同表土除去状況（南より），３：同遺物出土状況（西より
４：同集石（南より），５：同SX01確認状況（南より）



図版 8　遺構写真

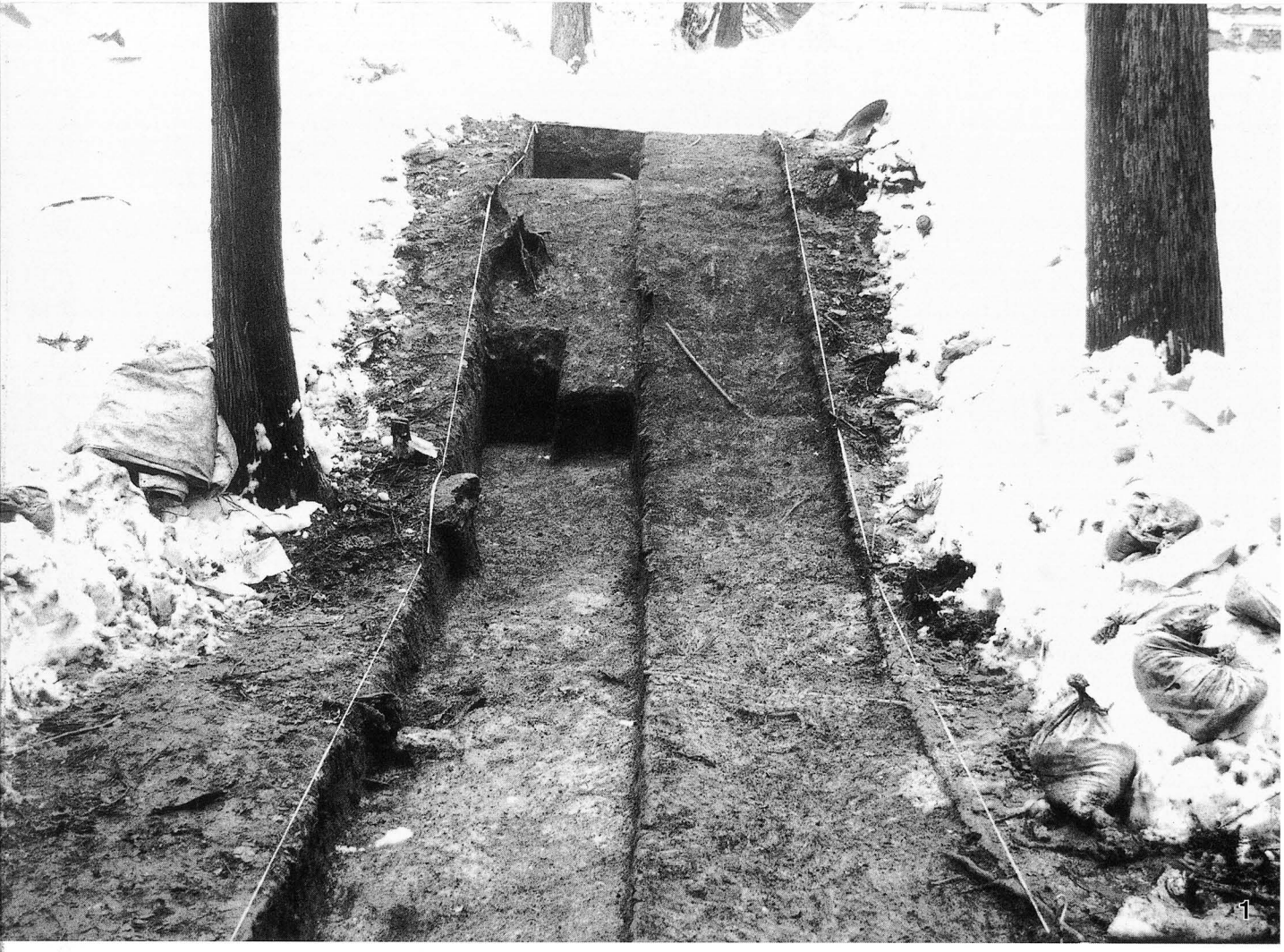
1：第2トレンチ西区（東より），2：同（西より），3：同表土除去状況（東より）
4：平坦面3西側の通路（南より）





図版 9　遺構写真

1：SD01（南東より），2：同土層堆積状況（北より），3：同半裁状況（南東より）
4：同遺物出土状況（西より）



図版10　遺構写真

1：第2トレンチ東区（西より），2：同（東より）